

特集 さよなら文大

おくることば
旅立つことば
卒業論文題目
文大だより
ぶんだい堂



様変わりする自然の中で

初等教育学科 教授 中井 均

平成19年度から本学の専任教員となり、早いもので今年度末に定年を迎えることとなりました。正にあっという間の10年間でした。それ以前の非常勤講師を含めると、35年の長きにわたって都留文科大学に関わってきたこととなります。専任教員となってからは大学の運営に関してもいささかの貢献をなしてきたと思っておりますが、ここでは研究・教育を中心に振り返りたいと思います。

私が最初に都留文科大学を訪れたのは昭和56年のことでした。前任の上杉陽名誉教授に「都留文科大学で非常勤講師をしないか」と声をかけていただき、先生の研究室を見せていただくとともに、大学周辺の古富士ローム層、田原の滝の柱状節理と古富士泥流堆積物、落合水路橋近くの猿橋溶岩などを案内していただきました。当時と比べて、地形的には大きな変化はないのですが、あの時に観察した露頭の多くは現在ではコンクリートや植物に覆われ、観察が困難となってしまったことが残念です。

本学の非常勤講師として勤めていた期間は、富士山の噴出物を主に上杉先生が、基盤の古い岩石を私が担当し、いわば分業体制で富士山とその周辺の調査研究を進めました。中でも三ツ峠山については平成7年度4名、8年度2名、9年度に3名の卒論指導を任せていただき、従来の説を覆す研究成果を出すことができました。上杉先生の後

任として専任教員となった平成19年度以降は、富士山周辺の基盤岩の研究とともに、相模川や富士川の川砂の研究、琉球諸島の海岸砂の研究、地震防災・火山防災教育の研究、地域の地質教材の研究などに研究・教育分野を広げてきました。

また専任教員となって以降、上杉先生が中心となって収集してきた富士山周辺～南関東各地の火山灰試料を整理し、後世に残すことにも取り組んできました。富士山に最も近い位置にある大学として、富士火山に関する試料をまとめて保管することは都留文科大学の使命であると考えています。試料の整理は何とか進んでいますが、残念ながら私の定年までには終りそうにありません。私も協力するつもりですが、次の世代に継続して取り組むことをお願いしたいと思っています。

最後に個人研究として、私は大学院時代から日本の中生代珊瑚類の研究を行っていましたが、専任教員となって以降、恥ずかしいことにこの研究は中断した状況となっています。ずいぶん時間がたって浦島太郎状態のところもありますが、かつて全国各地で採取してきた化石試料をそのまま死蔵することは良くないと思い、来年度以降、立場を変えてもう少し都留文科大学にお世話になる予定ですので、“立つ鳥跡を濁さ”ないように、少しずつ片をつけていきたいと考えています。



平成28年度地学ゼミ3年生と、二十曲峠から富士山を望む



ありがとう 文大

初等教育学科 教授 柳 宏

28歳で体育教員として初等教育学科専任講師に着任して以来、38年間が経ちました。着任当時、大田堯学長が「新しい芽」を提唱し毎年教員を増員しており、私も「新しい芽」として採用されました。以来、8人の学長の下で研究・教育を続け、多くの卒業生を輩出してきました。

そもそも私が体育教員を目指した理由はというと、1964年東京オリンピックを契機に日本では様々なスポーツが盛んに行われるようになりました。しかし、日本社会でのスポーツの文化的価値は低く、「頭が悪いからスポーツぐらい出来ないとな。」とか、「スポーツ選手の頭は筋肉で出来ている。」などと揶揄されていました。スポーツ「大好き人間」の私にとって、このような言葉に疑問、怒りを感じ、「なぜこのように言われるのだろうか？それなら将来はスポーツ文化の地位向上に関わっていきたい。」と素直な気持ちで考えるようになりました。私は東京の超進学校と言われる私学に在籍しており、将来の進路を相談したところ、先生方総てが「我が高校に来て、何で体育教師の道なんかを選ぶのか？」と反対されました。へそ曲がりの私は、体育教師の道を選ぶことにしました。

あれから約半世紀が経とうとしています。スポーツの文化的地位は飛躍的に向上しました。「スポーツ選手は頭が悪い。」と言うような人はほとんど居なくなり、もし居てもそのような人は逆に

見下されるようになりました。私が地位向上にどれだけ貢献できたかはわかりませんが、私が指導した体育専攻生やバレーボール部の卒業生達が日本各地の教育界で活躍し、スポーツ文化の向上・定着に貢献したことは間違いないと確信しています。

38年間の長きにわたり、都留文科大学の体育教員として勤めることが出来たのは、多くの素敵な人達に関わり、支えられてきたからです。長先生や一木先生は28歳の若造だった私に大学人としてのあり方を一から教えてくれました。後輩の麻場先生はアスリートとしての考え方や競技指導場面での学生対応の仕方を見せてくれました。事務局の方々は研究・教育を初め、委員会活動をいつもサポートしてくれました。私は多くの人達に「支えられ、助けられ、育てられ」定年を迎えることが出来ました。皆さんに感謝します。

そして、最も私を支えてくれたのは初等教育学科の「学生」です。小学校教員を目指す学生達は私の言葉をいつも真剣に聞いてくれました。明朗快活、真面目で辛抱強く、底意地悪く無く、卑屈にならない学生達に囲まれ、様々なことを考えさせられ、教えられてきたと感じています。定年を迎え、いま私はとっても「幸せ」です。これから都留文科大学に関わる人たちが皆「幸せ」であることを祈念しています。

ありがとう。文大。



ゼミ生と



女子バレーボール部と



研究者養成を目指して

英文学科 教授 今井 隆

専任講師として1982年に本学に着任してから35年を迎えます。ずいぶん長くいたという感想と、あっという間に日々が過ぎ去ったという感じがambivalentに錯綜しています。着任の年は、5年に1度開かれる国際言語学会議が8月東京で開かれた年で、一般部門とワークショップなど3つの口頭発表をしました。また、6月には、上智大学で日本言語学会大会でも口頭発表をするなど本学に着任して慣れないなか研究も多忙の年でした。

そのような多忙な中、3、4年生の有志から前年に出版されたばかりのチョムスキーの著書 *Lectures on Government and Binding* (Foris Publications) を読む会を依頼され、夏休みが始まったばかりの1週間やりました。その時参加した学生2人がのちに筑波大学大学院へ進学し、現在岩手大学でそれぞれ教授と准教授になっています。

このことがきっかけになり、私は、大学の教員養成をしようと思いました。本学は、教員養成で有名ですが、大学の教員養成も大事なことであると思ったからです。それ以来現在まで7人の教え子が国立大学に3人、県立大学に1人、私立大学に2人、研究、教育に従事し、また、アメリカ、シカゴにあるノースウエスタン大学癌センターで「トリプルネガティブ乳癌」の研究に従事しているものが1人います。近い将来多くの女性を救う研究になると期待しています。また、現在大学院に在学中、今年4月から大学院へ進むものもいます。最後の私のゼミ生です。そして、すでに何人か「孫弟子」もできて嬉しく思っています。

私の専門の理論言語学は、この35年間に大きく変遷していき、2000年以来、生物言語学という生物学を基盤にする言語研究という超学際的分野へ進化し、発展して今に至っています。当初の生成言語学は、普遍文法の中の規則・原理と諸言

語構造を統一的に扱える理論でしたが、現在は、生物学特に遺伝子学の研究の進歩、脳科学の研究の進歩から生物学を基盤に置く研究、例えば、ヒト言語の起源と進化の研究、幼児の脳内で言語能力がどのように個別の言語を獲得していくのかという研究があります。脳の活動がfMRIなどからよくわかるようになり、今後の発展が期待されています。

私の在職期間中に、本学も2号館、3号館、新図書館、国際教育学科棟もでき成長して来ました。さらに30年には、教養学部も増設され、31年度県合同庁舎跡も本学に移管され、新しい研究棟ができるようです。本学は、これからも発展し続けることを願っています。

この間、世界はdiversity(多様性)を認める方向へ進んで来ました。様々な違いを認め合うことの重要性を若い人たちに教えていかなければいけないと思います。私は、本学を去ります。今おられる方々に様々な「多様性」を学生にご指導していただきたく思います。



4年ゼミ生と共に



さよなら文大

英文学科 教授 大平 栄子

1990年、都留文科大学に着任して27年、カーリー（インドの女神）クラブの仲間（女性教員）と共にすごせた時はあっという間に過ぎようとしています。この間さまざまな変化がありました。私の在任中には、外国語教育研究（現語学教育センター）センターをはじめとする諸センターの創設、最近では国際教育学科の創設などがありました。ハード面でも、コミュニケーションホール、新図書館、3号館、5号館、そして合同庁舎の場所の利用を含めた「知のフォレストキャンパス」構想が実現されつつあり、大学の発展を日々実感するこのごろです。

交換留学先も、私の着任時、英語圏はなく、現在の多彩さを考えると隔世の感があります。学生の興味関心も多彩になり、私の英語圏文学・文化研究ゼミの研究対象は、かつては英文学の作家が中心でしたが、今ではインドを含むアジア英語圏の多様な問題をテーマとする学生が多くなりました。21世紀に入る頃から、学生の関心が多彩化していることに英文学科として対応すべきという議論が活発化し、カリキュラムを大幅に改革することになりました。

それに対応すべく、私たちも研究領域を拡大する努力をしようとの合意がなされました。私自身も2001年のデリー大学の客員研究員としてインドに滞在した経験を契機に、インド英語文学に焦点を合わせて研究を続けてきました。ゼミ生からインドに一緒に行きたいという要望が寄せられるようになりましたが、この約束が果たせなかったのは残念なことです。私のフィールドは1947年の印パ分離独立の後遺症の残る地域でテロの危険と隣り合わせのところでしたので、なんども怖い目に遭った私としては迷いがありました。

学生の卒業後の進路へのヴィジョンも多彩化してきました。夢を実現しようとする積極性も顕著になり、それを支援する体制も整ってきました。

学生生活全般を支援する担当者として長年かわってきた私としては、勉学や将来のことを積極的に考えるベースを作ることの難しさも実感してきました。

学生時代はいわゆる「疾風怒涛」の悩み多き時期です。加えて、大学周辺にほとんどの学生が居住している村的コミュニティは居心地のよい場所である反面、人間関係の距離を保つ上で大変なところでした。文学を研究してきた者として、文学（文化テキストの「物語」も含む）との深い対話を通して自己が見えてくる、深いコミュニケーション力や人間関係への洞察の力が養成されることを、卒論提出1か月前頃からのゼミ生の踏ん張りから実感させてもらいました。ジェンダープログラム創設のための仲間の方々を始め多くの教職員の方々にもいろいろお教えいただきました。

皆さまへの感謝の念をこめて、都留文科大学がこれからもいろいろなことに挑戦されることを祈念してご挨拶とさせていただきます。



3年ゼミの新年会にて



環コミでやったこと、 楽山で学んだこと

社会学科

環境・コミュニティ創造専攻 教授 平林 祐子

社会学科が「環境・コミュニティ創造（環コミ）」と「現代社会（現社）」の2つの専攻になる1年前の2006年に、私は環コミの環境社会学ゼミ担当の教員として着任しました。

「環コミ」専攻の目標は、地域社会とその根幹にある環境の継承や利用、創造について、地に足を付けて考え、実際に行動する人を育てることにありました。そのため、文献・ネットだけでなく社会や環境の現場から学ぶこと、そして色々な立場の人と協働する作法を身につけることを重視しました。

「フィールド体験」「プロジェクト研究」「ワークショップ」「フィールドワーク」「フィールド・インターンシップ」等々の特徴的な科目を含むユニークなカリキュラムを、試行錯誤しながら運営した11年でした。

他のどこにもない、環コミ独自の新しい科目を開講するにあたっては、既存のシラバスを下敷きにすることもできません。特に専攻開始初期のころは、文字通り「走りながら考える」状態で、プログラムをつくり、実施しました。スタッフで知恵やスキルを出し合うだけでなく、学生の皆さんの反応から多くを教えられました。その意味では、新しい専攻をつくっていく過程で、教員と学生が共に学ぶことが出来たのだと思います。

環コミの学びは、「ガバナンス」、つまり全国一律の指示に従うのではなく、地域で暮らす人々が自分たちで考え、実践することが求められている今の時代に、必ず役立つものになったと思います。私自身も、環コミにかかわった12年間で、本当に得難い体験をさせていただき、感謝しております。

赴任した当初、私はもっぱら「環境問題をめぐる人間の行動」に関心があり、自然環境からは縁遠い人間でした。「自然が好き」といってもそれはほぼ、暖房の効いた快適で安全で清潔な部屋の中からガラス越しにみる「自然」が好き、という

意味でした。

文大に勤めるようになってしばらく経ってから、「ガラス越し」ではない自然についても、体験的に知るようになりました。「寒いし、事故の危険があるし、野生動物もいる。人間は本当に、なんて無力なんだろう！」というふうに。

しかし、そういう時ほど、「生きている」と実感すること、どうしようもない自然の力や厳しさ美しさを実感することはありません。人間と自然のつき合い方についての自分の考えも、変わってきた気がしています。

ガラス越しでない自然に触れるようになったきっかけの一つは、やはりこの地域の自然です。研究室から毎日眺め、折々、歩いたりランニングしたり、お弁当を食べながら過ごしたりした楽山の四季の素晴らしさは、忘れることはないでしょう。



よく歩いたキャンパス横の楽山公園。
桜も紫陽花も、本当に素晴らしい。



都留文科大学の思い出

教職支援センター

特任教授 金山 光一

私は都留文科大学に来てSATを中心に4年間担当させてもらいました。都留第一中学校、都留第二中学校、東桂中学校の三校を主に担当させてもらいました。いつも三校の先生方は忙しい中でも私に笑顔で対応してくれました。また、学生をいつも気持ちよく受けていただいたことにとても感謝した4年間でした。私は相模原市で中学校の教員をしていましたが、この都留の中学校の空気は自分が働いていた中学校と同じように感じました。なぜ同じ空気を感じたのでしょうか。それは今頃になって少しずつわかってきました。

今を思えば、私が教員をしていた相模原市には多くの都留文科大学出身の先生が働いていました。相模原市は戦後、急速に人口が増えてきた神奈川県で山梨に一番近い町で、都留から山を越えればすぐです。50年前はわずか10万人の町でしたが今は70万人を超える都市になりました。そこでは多くの卒業生が神奈川県の教員として採用され、相模原市に配置され、相模原市の教育文化を作ってきました。私の知る、多くの都留出身の先生は優しく、いつも教育に夢を持っていました。ある先生は学校でポニーやアルパカを飼って子どもたちのヒーローになっていました。また、ある先生は生活科や総合的な学習の研究に熱心に取り組む教育界が注目する発表をしました。先生の中には反骨精神が旺盛で、「学級担任でなければ先生でない」と教師を貫いた人もいました。

ところで私の大学に在職した4年間、相模原市教員採用試験で合格した学生や卒業生は40人を超えていると思います。この10年間を合わせれば100人に近い若い力です。私は、時々、市内の小中学校を訪れて、彼らの様子を見るのがあ

ります。校長先生から文大出身の若い先生が活躍していると聞いてうれしくなります。彼らがこれから相模原の教育を担っていくと思うとわくわくします。

都留文科大学は学生が学業に専念できる落ち着いた環境の中にあります。さらにこの大学には熱心で温かく、教育をよく理解している先生方いつも優しく相談に乗ってくれる事務職の方がいます。こんな素晴らしい環境で育った学生は、卒業しても、いつまでも大学で過ごした4年間の思い出なのでしょう。そして卒業してからも誇りを持ち続けるのでしょう。

私はここで退職しますがこれからも彼らを応援していきたいと思います。最後に学長先生および教職支援センターの先生方、そして事務職のみなさん、本当にお世話になりました。



都留っ子ワクワク教室（縄文教室）にて

おくることば

旅立ちの日！！



初等教育学科講師
堤 英俊

人生の岐路に立った時に、必ず開く1冊の本があります。『旅をする木』という本です。著者である写真家の星野道夫さん（1952-1996）のことは、10数年前、大学卒業の年に、恩師の紹介で知りました。アラスカの大地に被写体をもとめた彼の写真や言葉、そして生き方に、何度も励まされてきました。私にとっては、折にふれて、「今生きている」という実感と、「たった一度の一生を自然体で生きよう」という感情を取り戻すための必須アイテムとなっています。

その本の中に次のような一節があります。

「結果が、最初の思惑通りにならなくても、そこで過ごした時間は確実に存在する。そして最後に意味をもつのは、結果ではなく、過ごしてしまった、かけがえのないその時間である。・・・ふと立ち止まり、少し気持ちを込めて、五感の記憶の中にそんな風景を残してゆきたい。」

都留で過ごした日々はどうでしたか？過ぎ去る時間の中で、様々な感情と結びついた風景が、身体に記憶されたことでしょうか。今後の人生において、それが、ふとしたきっかけで身体の内側から湧き出てきたときには、少し時間を作って、じっくり都留の思い出に浸ってほしいなと思います。

私が都留文科大学に着任して4年を共に過ごした学生たちの多くが今回卒業します。みなさん、ずいぶんと大人になりましたね。率直にさびしいです。でも、そろそろ別れのとき・・・また会いましょう。

人間の力



国文学科教授
加藤 浩司

ご卒業おめでとうございます。4年間をともに文大で過ごした者として心よりお慶びを申し上げます。

この間、世間では様々な出来事がありました。個人的に感慨深かったのは囲碁で人工知能（AI）が初めてプロのトップ棋士に勝利したことです。その後は人間がAIに勝つことの方が難しくなってしまう、今ではAIの打ち方をプロ棋士達が参考にしています。囲碁でも人間が機械に追い抜かれたのです。

しかし、このこと自体は別に悲しむべきことではありません。機械は人ができなかったことも代わりにどんどんやってくれます。自動車もパワーショベルも、産業ロボットも。それらにより人間社会はますます便利で豊かになってきました。

もし悲しむべきことがあるとしたら、機械がやって

くれることで便利になり、人間が本来有していた能力を弱らせ、ついには失ってしまい、生き物として退化している面が多々あることです。

授業で発表資料の文章中に空白のある学生がいました。「この文字をどうしてもワープロで打つことができません」と言うので、外字入力という方法もありますが、素朴に「後から手で書けばいいじゃないか」と教えると、「ああそうか」と驚いていました。ワープロやパソコンがなかった時代には当然だった「文字を手で正しくきれいに書く」という能力が、現在急速に失われているように思われます。

文部科学省は高校以下でもICTを導入した授業や学習を考えているようですが、私はせめて義務教育では今まで通り「文字を手で正しくきれいに書く」訓練をしてほしいと思います。古臭い考え方もかもしれませんが、必要最小限のものしかない状況でも学ぶことを可能にする最低限の能力だと思ふのです。

卒業して教員になる方も多いと思います。子供たちには、便利な道具や機械がないときでも工夫すればなんとかできるという体験をさせてほしい。それを「体にしみこませるように」、あるいは「あのとき先生はこんなふうにしていた」と脳裏に描けるように、育ててほしいと思います。いかなる事態にでも柔軟に対応できる知恵と工夫の力こそ人間だけのものだと思います。

よほどの理由があって 都留文科大学



英文学科教授
儀部直樹

皆さんご卒業おめでとございます。僕は神秘的で面白い話が好きなので僕の「おくることば」はそれにします。「袖振り(擦り)合うも多生の縁」という言葉がありますね。「多生」は仏教語で何度も生まれ変わること「他生の縁」とも書きますが「多少の縁」ではありません。無理に信じる必要はありませんが、僕たちはこれまで何十回何百回と生まれ変わりを繰り返してきたんです。これからも。前世・過去生の存在は、世界の権威ある精神科医による退行催眠療法(いまや前世療法の第一人者であるアメリカの精神科医ワイス博士[1944-])は、実は30歳代後半までは輪廻転生に懐疑的な唯物論者でした)の過程で図らずも明らかになってしまった科学的な事実です。この学説には、筋金入りの唯物(唯脳)論者の科学者であるエリート医師や臨床心理学者によって集められた膨大な証拠(何万件にも及ぶ被験者[唯物論者もいる]の証言事例の検証と症状の改善)がありますので、この事実を否定するのがむしろ難しいということです。僕はこのことを飯田史彦著『生きがいの創造』を読んで知りました。せっかく科学的に実証されたわけですから、

この生まれ変わりという概念を宗教的・思想的な観点だけで捉えるのではなく、生きがいある人生を送るための思考・ツールとして活用してみてもどうでしょうか。研究によると、僕たちは偶然にこの宇宙に存在しこの時代この場所に生まれてきたのではなく、魂再生のために過ごす中間生でマスターズと呼ばれる光の指導のもとソウルメイトたちと相談しながら、愛を学び互いに成長するために今生での人生を決めてきたそうです。人生の岐路に立った際の判断はその時の選択に任せるというシナリオを書いてくる人もいるらしいですが、あえて、そう簡単に思い通りにはならない人生を自分で計画してくるのです。でもご安心ください。その人生は甲子園の高校野球のように勝ち抜き制ではなく、頑張れば挽回できる敗者復活制になっています。いずれにしても人生は自作の問題集なのですから「自分は偶然…した」のではなく、「自分はよほどの理由があって…したのだ、全て計画通りで順調」という思考の人生観のほうが生きがいを持ちやすいといわれています。ですから皆さんは本日「よほどの理由があって」都留文科大学を卒業されました。ソウルメイトというのは、過去生で互いの成長のために何度も関わりのあった人たちです。来世でも。「えー?!またあの人?!」とショックを受けないでください。性別や見目形、互いの間柄、時にはそのキャラまで変わりますので。もしかしたら皆さんの中の誰かの過去生で、この僕もソウルメイトとして一枚噛んでいるかもしれません。その時は僕が皆さんの生徒(お嬢様キャラ?)だった気がします。今後の長い今生において皆さんは「よほどの理由があって」数多くのソウルメイトと貴重な出会いと別れを経験し、「よほどの理由があって」日々の仕事や課題に取り組み、そういったことを通してたくさん愛を学んでいくことでしょう。

四つ足で押してみる



社会学科教授
黒崎剛

卒業していく人にどう声をかけていいのかがだんだん難しくなっているのとまどっています。何も私が年を取って「卒業、何がめでたい」とかひねってしまったわけではなく、これからの人間の未来というものがあまりに見通し不明なので、心から「世界へ羽ばたくんだね、おめでと！」とは言えなくなってしまったからです。「未来が不透明なのはいつの世でもそうでしょう」と言われそうですが、この頃はまた

格別です。Brexit、トランプ、IS、慰安婦、移民難民、核兵器、拳句の果てに未履修問題などと続けていくと、古い問題の堆積の上に新しい現象が積み重なってきて、私も頭がパンクする気がしますし、学生諸君が大学で4年くらい勉強したって何が何だか分からないな、と嘆くのは当然であるかと思えます。勉強したか否かはともかくとして。でも、はばたけなような世界であるなら、羽ばたかずに四つ足で歩くというやり方もあります。「牛になってうんうん押すのです」とたしか漱石か誰かが若者にアドバイスしているのをどこかで読んだ覚えがあります。出典を忘れたわりには私は若いころ読んだこの言葉が気に入っていて、ときどき思い出しては自分を励ましています。私はウシ年生まれでもあるので。もしかしたらすごく含蓄のある言葉かもしれません。卒業生の皆さんも、くじけそうになったらこれをちょっと思い出してみてください。

しなやかに、心ゆたかに



比較文化学科教授
大辻千恵子

ご卒業おめでとうございます。

いろいろな意味で、晴れてひとり立ちですね。すでに社員研修を経験し希望に胸膨らませている人、あるいは不安になっている人、まだ最終目標に到達できずにいる人、さまざまかもしれません。どんな言葉でみなさんを送ろうかと考えましたが、やはり、今、日本も含め世界中で大きなうねりとなっているセクハラ撲滅をめざす動きについて触れることにします。

アメリカハリウッドの女性俳優たちの“Time’s Up (もう、おしまい)”の合言葉、一般の職業でセクハラ被害に遭った女性や男性を支援する“Time’s Up”のセクハラ救済基金の発足（すでに莫大な基金が集まっています）、そしてツイッターでセクハラを告発する“Me Too”の運動。その輪は世界中に広がっています。

2018年1月はじめのゴールデン・グローブ賞受賞式会場では、男性も含めて、出席者が黒の衣装でセクハラ反対の立場を鮮明にしました。ハリウッドで告発された大物プロデューサーや有名俳優、辞職に追い込まれた大物政治家（イギリス、アメリカ）、議員のセクハラ疑惑の調査を立ち上げた欧州議会……。日本でも演出家が謝罪しています。

これらは、みなさんが卒論執筆に本格的に取りかかろうとしていた2017年の秋から起こっています。この動きにみなさんは気づいていましたか。ある意味、みなさんはラッキーかもしれません。世界中がセクハラに対して「もう許さない」というメッセージを発している時期に社会人になるわけですから。朝日新聞デジタルのアンケート調査（2017年12月26日～2018年1月17日 計713人回答）によると、「#MeTooでセクハラなどの性被害について声を上げる動きをどう思いますか」という問いには、89%が共感する/どちらかという共感する、「日本社会は、セクハラなどの性被害について声を上げやすい社会だと思いますか」の問いには、93%がそうは思わない/どちらかというそうは思わないと回答しています。セクハラに対し「ノー」と言いづらい社会。どのような言動がセクハラにあたるのかをまずは確認しましょう。何かあれば“Time’s Up”の気持ちで。他のハラスメントについても深く理解することにつながります。

大学院修了生におくる言葉



大学院文学研究科
国文学科准教授
野口哲也

大学院修了生の皆さん、修了おめでとうございます。

皆さんはそれぞれ、学部で研究という世界の魅力を知り、卒業論文を完成させる過程で自身の関心を深め、さらに学術的に高いテーマを探究するという志を持って大学院に進んだわけですが、2年間、徹底的に自分の課題に取り組んだ感想はいかがですか。修士論文を書き上げた際に、その学術的な水準を審査する指導教員に対して、また先人の研究の蓄積に対して、あるいは進学当初の自分の動機を省みて、いろいろ思うところがあったのではないのでしょうか。

私自身が修了した時のことを思い返すと、率直に言ってまだまだ自分には分からないことが多く、力量も不十分なのだという印象が強く、自分の研究が胸を張って提出できるような有意義な結論に至っていないという失望を味わっていたような気がします。もしかしたら、学部の卒業論文の方がまだ純粋な達成感があったかもしれません。授業で接してきた院生の様子を見ても、皆さんも多かれ少なかれ私と似たような思いをお持ちではないかと思っています。

もちろん、皆さんの研究は複数の研究者の審査によってその価値を認められて修了されるわけですが、それ以上に、自己に対しても他者に対しても正当な評価の眼を持ちつつ、八方塞がりのように見える苦しい局面にあっても思考や議論を重ねていく粘り強さこそ、皆さんがこの2年間で身につけられた力ではないでしょうか。何かを知るほど自分の無知を知らされるというのは情けなくもありますが、楽しいことでもあります。教職に進まれる方、企業や公務員として勤める方、さらに進路を模索する方もいるでしょうが、今後も専門家としての自負と純粋な探究心を忘れずに活躍してほしいと願っています。

旅立つことば

都留での4年間



初等教育学科4年
河村沙耶花

私は山梨に生まれ、これまでそのほとんどを山梨で過ごしてきた。どこの大学に進学したいというような欲もなく、なるままに都留文科大学に来てから4年の月日経った。最初のころは慣れない一人暮らしということもあり、さみしさと不安で、すぐにでもやめたかったが、大学での様々なことに挑戦する機会や多くの人との出会いが、そんな私を繋ぎ止めてくれたように感じる。

私の大学生活の中で多くを占めたのは、子どもたちと自然体験活動を行うサークル活動だろう。定期的に子どもたちと関わり、活動してきたことで、改めて子どもの可愛さや、行動の面白さ



サークルのクリスマス会

を感じると共に、子どもとの関わり方を学ぶことができた。様々な強みや経験を持つ仲間と共に活動ができたということも、自分自身の成長につながったと感じる。また、障害を持つ人と一緒に行うフロアホッケーの活動や、様々な講演会にも積極的に参加したことで、物事に対する視野も広がり、自分自身の糧になった。

そのような様々な経験が後押ししてくれたことで、来年度から小学校教員として働くことも決まった。大学で出会ったすべての人に感謝し、これからも自分らしく頑張っていきたい。

素晴らしい出会い



国文学科4年
大石真衣子

期待と少しの不安を抱えてこの都留にやってきてから、もう4年の月日がたった。馴れない土地で戸惑っていたことが今では遠い昔のことに思われ、ここ都留が「第二の故郷」とすら思える今日である。

振り返ると、私の大学生活の大半を占めていたのは所属していたアカペラサークルでの活動であった。毎年総勢120人を超える部員に囲まれて生活した4年間、合わせてみれば200人を超える仲間との出会いがあった。私はサークルの会長として様々な企画を行ったが、そのどれもが一人で成し遂げたものではなく、仲間の支えの中であったからこそ達成できたことであったと強く感



アカペラサークルでの集合写真

じる。全国各地から、ここ都留に集まった仲間たちに会えて本当に良かった。この素晴らしい出会いが私の大学生活4年間の宝物である。

来年からは憧れていた編集の職に就き、また新たな土地で新生活をスタートさせるが、この都留での出会いは一生大切にしていきたいと思う。都留へ送り出してくれた家族、ご指導くださった先生方、そして最高の仲間たちに感謝を示したい。ありがとうございました。

挑 戦



英文学科4年
遠藤大珠

大学を卒業し、これから新たな環境で生きていくことになるが、非常に充実した大学生活を送ることができたと胸を張って言える。

小中高は失敗が怖いため、挑戦することを躊躇し、後悔する学生だった。もうこんな思いはしたくなかった。そこで私は大学に入る前に一つの誓いを立てた。それは自分の気持ちに正直に挑戦し、後悔をしないよう生きるということだ。この誓いの通り私は大学生活を送った。

以前から興味があったジャズピアノを始め大切な仲間ができた。思えばこれが大学での初めての大きな挑戦だった。以前は人と関わる際、傷つくのが怖くて一線を引いていたが、大学では勇気を出して正直に接し、何でも話せる仲間ができた。そしてジャズ研は本当の自分を受け入れてくれる私の居場所であると確信した。

ホームステイにも挑戦し、多くを学んだ。コロラドで



ジャズトレインにて

は初日から買い物で騙されたり、大変な思いをしたりもしたが、助けてくれる人がいて、人の温かさに触れることができた。また自分の意見をハッキリと伝える大切さを知り、一人で行動していく勇気も身に付けることができた。

勇気を出して挑戦していくことの楽しさ、大切さを学び、大きく成長することができた。4月から働くことになるが、さらに挑戦していき自己をより成長させていきたい。

最後に大学生活私と関わり影響を与えてくれた友人、先生、家族、すべての人々に感謝を。本当にありがとうございました。

感 謝



社会学科
現代社会専攻4年
永田 明

都留文科大学への入学が決まり、初めて都留市に来た際、同行していた兄が「こんな所で4年間も暮らすのか、明ドンマイ！」と言いました。都会で大学生活を送っていた兄にとって、娯楽の少ない退屈な大学に見えたのだと思います。4年間の大学生活を終えた今、全くその通りだと感じています。都会での圧倒的な娯楽の多さには勝つことができません。

しかし、都留文科大学で4年間を過ごせたことは、かえって有意義だったと思います。多すぎる娯楽に惑わされることなく、自分の置かれた状況



友人と夕暮れの湖畔にて

に考えを巡らせることができ今後の人生に対して明るい指針を持つことができました。それと同時に両親、家族、友人、恩師に対して感謝の念が湧きました。これからも大切な関係性を保っていきたいと思います。

最後に、社会学科が改編されることは非常に残念ですが、恩師の教えを胸にいつまでも学び続けていきたいです。都留文科大学の今後の更なる発展を祈り、旅立つことばとさせていただきます。

都留での出会いに感謝



社会学科
環境・コミュニティ
創造専攻4年
高田 賢仁

都留での新しい生活に期待と不安をにじませた入学式から4年たった今、これからの社会人生活に期待と不安をにじませながらも、晴れの卒業式を迎える日が近づいてきた。

短くも濃い4年間であった。4年間の中で、様々な人と出会い、温かいふれあいを感じることができた。それは、都留ならではのことだと私は感じる。

右も左も分からなかった授業で、毎日共に勉強した友人。少ない人数で、時には仲間割れしながらも、ともに練習を頑張った部活動の同期。学内で会うと、話しかけてくださった先輩方。また、元気に声をかけてくれた後輩たち。そして、学問を導いてくださった先生方。



部活動最後の山梨県内リーグにて

一見すると、どこの大学でも同じような出会いはあるが、他の大学には負けないくらい密度が濃く、温かい出会いであった。

これから、仲間がそれぞれの新たな一步を踏み出す。そこには、新たな出会いが待っている。その新たな出会いも、きっと自分の人生において大切なものとなる。出会いが大切であることに改めて気づかされた4年間であった。そのような大切なことに気づかせてくれた、友人、先輩方、後輩、先生方に感謝を示したい。4年間ありがとうございました。都留での出会いに感謝。

出会い



比較文化学科4年
藤原 千晶

都留文科大学に入学して5年が経つ。入学当時、5年も滞在するなどは考えておらず、自分の将来については漠然としていた。そんなスタートをきった私の大学生活だが、今言えるのは、5年間大変充実したものであったということである。それは仲間やスペイン語との出会いが大きく影響している。

まずは学科やサークル活動での「仲間」との出会い。私の大学生活はこの「仲間」なしに語れない。いいことも、時には悪いことも伝え受け入れ合える仲間の存在が、人として大きく成長させてくれたと思う。周りの同級生はすでに社会の荒波にもまれている。そのギャップに焦りを感じることもあるが、いつまでも変わらぬ関係でいたいと思うばかりだ。

そして「スペイン語」との出会い。“海外に行きたい”という漠然とした気持ちだけで2年生の夏に参加したスペイン留学プログラムがすべての始まりだった。現地広がる、日本とは異なった人々、文化、雰囲気に圧倒さ

れ、感動した。それからスペイン（語）への想いを断ち切れないという私のわがままで、両親には無理を言ってしまったが、1年間留学へ行くことを決断した。今思えばこれは、初めて自分が本当にやりたいことを明確に見つけた瞬間で、大きな決断だった。両親に真剣に自分の想いを語ったのもこれが初めてだったと思う。留学は簡単ではなく、お金もかかる。想いを打ち明けた時になんとと言われるか不安だったが、一つ返事で了承し、とても貴重な機会を与えてくれた両親への感謝は尽きない。留学中には、多くの苦楽もあったが、新たに出会った文化や人々・様々な葛藤は、私の今後の人生における大きな糧となることは間違いない。

今までになく自分や人と向き合い、世界の広さを実感したこの大学生活に感謝している。まだこれから大学生活が残っている後輩には、限られた時間を無駄にせず、たくさんものを見て、感じ、学んでほしいと思う。



現地での日西文化交流プログラムにて

専攻科での学び



文学専攻科
教育学専攻
中飯田真依

私は、初等教育学科を卒業後、もっと教育学を学んでから教壇に立ちたいと考え、文学専攻科に入学しました。専攻科では、様々な先生方の実践を学び、その内容や教育課題について仲間たちと議論をしながら教師の役割や子どもたちとの関わり方について深く考えることができました。

この1年間は、専攻科での講義だけでなく、キャリアデザインワークに関わったり、学びをつくる会などの学外の学習会や研究会にも参加したりと様々な場所で学ぶことができました。キャリアデザインワークでは、特別支援教育を学ぶ学生とも協力し、「つながり」をテーマに発達障害を抱える中高生が自らの将来やキャリアについて考える



キャリアデザインワークの様子

ことができるプログラムを作り、実践しました。一から活動を作ることは初めての経験でしたが、活動する子どもたちのことを考えながら、発達障害についても深く考えることができました。

最後に専攻科を含め学んだ都留文科大学では、多くの仲間や先生方と出会い、たくさんのことを学ぶことができました。ここで学んだことを忘れず、子ども一人ひとりに寄り添い、学び続ける教師を目指します。お世話になった先生方、ともに学んだ仲間たち、そして、誰よりも私たちを見守り、応援してくれた家族に心より感謝申し上げます。

充実した2年間

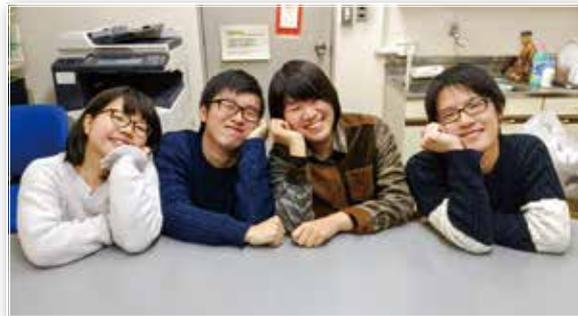


大学院
国文学専攻
天野美加

「卒業」ということばを思い浮かべたとき、大学院で学んだ2年間の大切さを実感いたします。

私が教員になると決意したのは、学部3年生のとき。国語教育学ゼミに入り、仲間たちから刺激を受けたこと、教育実習を行い、教員という仕事の魅力を実感できたことがきっかけでした。しかし、そこで国語という教科に対して「今まで自分は真剣に向き合ってきたのか」ということ実感したのもまた事実です。「国語科の教員として自信を持って教壇に立ちたい」との思いで大学院に進学いたしました。

大学院では専門的な知識を求められることも多くなります。よって、学会や研究会に参加する機会も増え、教育現場での実践を学びながら教材に対する見識を深めることができました。また、研究会の中で修士論文について助言をいただける機会にも恵まれ、研究を実践で活かしていくための方法を具体的に検討いたしました。自身の目標である「学びつづける教員」としての根幹部分は、この大学院で



記念の一枚

学んだ経験と知識から築き上げたものであると考えます。専門を問わず大学院の講義では国文学に関して自身の教養を高めるものでありました。日本語という言語について深く考えること、またその言語から生み出される「ことば」に着目し、どのように文学を捉えるのか、またそこからどのような文化を読みとることができるのかということ学びました。講義は毎回新しい知見を得るものであり、幅広い視点を養うこともできたと思います。

このような充実した2年間を送ることができたのは、学部から一貫してご指導くださった牛山恵先生や共に学んできた仲間、そして多くの先生方からの支えがあったためです。みなさんのおかげで、私は大きく成長することができました。この場を借りて感謝申し上げます。今後は大学院で学んだ2年間で大きな糧として、国語科の教員として精進していく所存です。本当にありがとうございました。

自己研鑽の2年間



大学院
英語英米文学専攻
鈴木佳祐



担当教員の講義風景

私は本学の英文学科を卒業後、2年ほど社会人生活を送っていました。再び都留で勉学に励むことになった理由は多々ありますが、中途半端なまま放置されていた自己の教養を高め、多角的な視点から思考力を養うことを第一の目的として、進学を決断しました。

修士課程での2年間は、あまりに早く過ぎ去ってしまった印象を受けます。これは温かく親切な大学院生達に囲まれながら、腰を据えて勉学に取り組んだ日々がとても充実していた証拠であると思います。教職員の方々と日常的に議論を交わすことのできる環境は、とても刺激的でした。学部

生の頃は心理的に遠い存在であった先生方と親しくなり、学びへの意欲はさらに深まりました。また、多くの近現代文学をひもとく過程で、作品の関連要素である歴史や政治経済、法学的知識にも手を広げて学び、今後の社会生活にも応用できる知識を多く身に付けることができました。

これから再度社会に旅立ちますが、大学院生として学んだことを血肉として、社会に貢献できる人材になるよう、常に学びの習慣を怠らないよう精進を重ねたいと思います。最後にこの場を借りて、今までお世話になった教職員の方々と文学研究科の皆さんに、心より御礼申し上げます。



初等教育学科 平成29年度卒業論文題目

麻場 一徳ゼミ

- 松本沙耶子 ピッチとストライドからみた100m競走に関する一考察
一都留文科大学陸上競技部 S.M の記録の変化から一
- 西海ひなた 心拍数の長期記録によるトレーニングに関する研究
一都留文科大学陸上競技部 H.N の場合一
- 長坂 黎 バドミントンにおける競技力と身体能力との関係
一都留文科大学バドミントンサークルに所属する選手の場合一
- 林田 小葉 女子4×100mリレーにおける各区間のタイム分析 一都留文科大学の場合一
- 坂本 奈穂 血液検査からみる栄養状態とパフォーマンスの関係
一都留文科大学陸上競技部女子部員の場合一
- 柏木 真央 都留文科大学女子学生の運動生活及び食生活に関する研究
- 大神田南海 女子100mハードル走の記録向上における一考察
一都留文科大学陸上競技部 M.O の場合一
- 佐野知奈美 小学生の80mハードル走に関する研究
一京都府小学生と全国小学生と比較して一
- 石井佑里菜 ピッチとストライドからみた小学生・中学生陸上競技短距離選手の疾走能力の特性
- 永瀬 綾夏 女子4×100mRにおける各区間のタイム分析
一都留文科大学女子チームと日本代表女子チームとの比較一
- 出塚 千恵 4×400mリレーのラップタイムとパフォーマンスとの関係
一都留文科大学陸上競技部女子の場合一

岡野 恵司ゼミ

- 名嘉 美乃 知的障害児に対しての算数指導
- 平間 聖規 格子多角形と格子点
- 堀池裕次郎 ゲームと代数の不思議な関係
- 宮良 長太 複素数と代数学の基本定理
- 長谷田郁人 Fermat の最終定理
一指数3の場合について一

春日 由香ゼミ

- 泉谷 里菜 『ごんぎつね』の授業における発問の研究
- 大釜 一俊 ことばの世界を広げる『ことば遊び』の研究
一漢字を使った『ことば遊び』を中心に一
- 佐藤那乃葉 一読総合法における「書きこみ」「書きだし」の研究
- 佐藤 春奈 教材『お手紙』の授業における並行読書と言語活動の研究
- 正田 智美 小学校音読指導実践の検討
- 福士 歩 被災地の子どもたちの作文研究
一児童・生徒が書いた東日本大震災一
- 牧田 浩輝 主体的・対話的で深い学びにおけるワークシートの有効性
- 向井 孝貴 子どもの為に創る学校図書館
一読書生活の活性化のための取組の検討一
- 吉田みずき 「絵本」の教材化の検討
一挿絵を読むことを中心に一

- 吉村 瑠璃 PISA型読解力における教科書分析と検討
一非連続型テキストの視点から一

佐藤 隆ゼミ

- 富島 舞 沖縄県の学力テストから見えてくるもの
- 遠藤 紗希 学力調査分析から見える日本の学力観とは
- 越智 水咲 変わりゆく学校と立ち向かう学校
一教師を守る教師になるために一
- 貝瀬 結香 競争原理を超える
一他者と世界とつながる教育一
- 高田 紗帆 個と個をつなぐ学級集団づくり
- 中込 晃己 生きる力を育てるキャリア教育
- 吉廣航太郎 学びの共同体の学校改革による学習意欲向上の可能性
- 渡邊 亮太 主体的・対話的で深い学びの意義と課題

筒井 潤子ゼミ

- 大川真奈美 「ほめる」ことの本質とは
一子どもの成長を支える言葉がけ一
- 大森絵里香 教師としてどう向き合うか
一いじめの歴史や自殺事件から今を考える一
- 小俣 綾香 緊張するということ 一対人関係から生じる恥の意識一
- 清野 志帆 教員として働きながら親になること
一子どもと生きる大人の思い一
- 高鳥 詩乃 現代と闘う若者
一現代の若者たちの生きづらさを考える一
- 福山礼士郎 「勉強」のイメージとその影響
一「勉強」を嫌うのか、勉強をすることを嫌うのか一
- 山崎 香澄 自分を認めるということ
一他者との関わりの中で生まれる自己肯定感一
- 川村 京子 核家族と母娘
一現代の家族における「父親不在」と母による娘への干渉一

清水 雅彦ゼミ・十川 菜穂ゼミ

- 川瀬咲衣花 日本の音楽教育におけるエッセンシャルスクール連盟
一10の原理の活用法一
- 小林ひかる 時代とともに歩む音楽
- 土屋 希美 学校生活における音楽の役割について
- 松木 千明 音楽と胎教
- 村田 茉莉 子どもが享受する音楽教育
- 力石 彩央 音楽のもつ力 一子どもたちに与える影響一
- 岡田理佐子 ディズニー音楽の魅力とその教材化

十川 菜穂ゼミ

- 浅尾 弘貴 音楽的能力と運動能力との関係について
- 大浜 惇 音楽が子どもに与える影響と効果
- 木下 理恵 音楽の授業におけるリコーダーについて
- 佐藤 麻優 音楽教育が発達障害児に与える効果
- 竹内 理子 障害児と音楽
一音楽療法が子どもに与える影響一
- 長谷川杏里 小学校における音楽教育
一親しみやすい授業づくりに着目して一
- 藤原雄一郎 音楽が人を豊かにするために必要な小学校音楽教育の在り方

淵上 真穂 音楽と人との関わり, 結びつき
—あの時あの瞬間を思い出させるすばらしい音楽の力—

古屋 陽菜 音楽が子どもに与える影響
—合唱とピアノに焦点をあてて—

松山ゆりか スクリャーピンの音楽 —神智学と共感覚—
吉村 優希 音律の誕生と音感を育てる音楽教育

添田 慶子ゼミ

徳川 遼 音楽がスポーツパフォーマンスに及ぼす影響
について

岡田進太郎 生涯スポーツとしてのソフトテニスの研究
貴岡晃嗣 セイバーメトリクスからみる高校野球強豪校
の特徴

木村さえり 逆上がりの指導法について
—オノマトペを用いた例—

松田 大樹 サッカースキルと新体力テストとの関係
又吉 周弥 ラグビースキルと身体能力・筋力トレーニング
との関係

平 和香子ゼミ

高木菜々美 児童の食育とお弁当に対する意識の比較
—“弁当の日”の取り組みを事例として—

永石 敬子 小学校家庭科における大型布絵本を用いた教材
開発
—ふきのとう文庫の活動から考える教材づく
り—

土井千紗都 支援学校における家庭科
—生活支援教材の提案—

高橋 晃大 消費者における「モノ」の循環に関する検討
有野 智華 認可保育園における自然体験活動実践

平川 真子 地域資源の有効活用
—道の駅による地域活性化—

高村 直暉 小学校家庭科における手先の巧緻性を伸ばす
教材開発 —革細工を用いた実践—

柘殖 麻衣 人権教育と家庭科教育
—アイヌ民族史と生活理解から—

山内 麻莉 教員養成大学を対象とした食育プログラムの
考案と実践

折田 和馬 食育による精神的食嗜好と食育の在り方

市原 学ゼミ

井上 信也・真野 慎平
恋愛関係崩壊における自己成長感について

北永 麻実・森田 実咲
直接の対人関係とLINEでのやりとりの関係性

松田 真琳・鈴木こゆき
血液型が人格形成に与える影響の有無につ
いて

成川 雅昭・松島 裕太
小学生を対象とした算数能力検査テストの
データ分析

間宮 勇太・山川 光希
直接の対人関係がLINE上でのやりとりに
及ぼす影響

吉田 聖 歯科治療におけるストレスの変化

井田 菜月・井原 梨穂
青年期における親子関係、対人関係及びアイ
デンティティの関連性

川戸 悠・高橋 梨沙
愛着スタイルと恋愛関係崩壊形態からみる
人の成長感

田中 昌弥ゼミ

足利 藍美 不登校と教師
—教師として不登校をどう考え向き合っ
ていくか—

時井 洸樹 個を生かす学級経営
—集団の中で個人が生かされるために—

戸田慎一郎 シティズンシップ教育における「多様性の尊
重」と「統合」に関する研究
—2010年連立政権成立以降のイギリスに着
目して—

西浦 咲 学習意欲を高める教育
—子どもの作文と国際調査、教師の実践によ
る3つの視点から—

乗松 拓弥 学級崩壊を防ぐためには
—子どもと子ども、教師と子どもの信頼関係
から考える—

布施 泰志 教室内における「リーダー」としての教師の
在り方

南 香帆 —パウロ・フレイレの思想の検討から—
今求められる教師の資質能力

—学級崩壊から考える—

堤 英俊ゼミ

糸山 笑加 戦略的「いい子」への教師の関わり
—学級づくりを通して—

尾西 菜那 自分探しの場としての「居場所」を考える
—家族と学校に着目して—

河村沙耶香 返答を強いられる場における「ことば」に関
する研究

—話すことが苦手な子への教師の関わりに着
目して—

黒田 依里 日常にあふれる子どもの「表現」
—教師とのかかわりの中で—

重松佑加子 自分なりの進路を選択すること
—嫉妬との関わりに注目して—

鈴木あすか 子どもの貧困と自然に触れる保育
望月 樹 ナラティブ・コミュニティにつかるとい
うこと

—現在起点の大学生に着目して—
米谷 文直 若者の自立と人生の軸 —構築と自覚のか
わり—

鶴田 清司ゼミ

安藤 朱音 対話活動で学びを深める

池田 希 個が生きる授業

上野 凌平 アクティブラーニングを効果的に活用するた
めの条件

高見沢綾香 教材づくりの工夫
—子どもの学びを深めるために—

長塩 寛史 学びを深める体験的な学習のあり方

久田 雄也 習熟度別指導は本当に有効か

堀 大誠 「ゆとり教育」は学力低下を招いたのか

宮古 涼可 個別学習の可能性

—イエナプラン教育から学ぶ—

山口 航平 学習意欲を高める理科の授業づくり

寺川 宏之ゼミ

- 岩立 実咲 ユークリッド幾何学における円周角の定理
尾崎 聖太 代数方程式のガロア理論
内海 梓 和算について
加賀 雄大 特殊相対性理論について
菱谷 紗世 素数の世界から見た初等整数論
三木 和憲 ギリシャの3大作図問題
一角の3等分について—
望月結香子 黄金比について
鷺山 莉奈 ピタゴラスの定理について
渡邊 厚之 確率について
渡部 希子 数学から見た音律分析

中井 均ゼミ

- 金澤 滉祐・白畑 夏希
富士山周辺の火山防災教育についての研究
—山梨県—
竹川 貴裕・田村 弥咲
富士山周辺の火山防災教育についての研究
—静岡県—
辻 弦太・永谷 真子・西牧 真優
西表島の岩石と海岸砂の研究

西本 勝美ゼミ

- 井芹 佳蓮 「それでいい」と思えること
—子どもの自立を支える関わりを通して—
佐藤 美咲 子育ての社会化に向けて
—育児の孤立化を防ぐ地域活動—
清水美佐子 教師が働きやすい環境を目指して
—苦悩の中にある期待—
中澤 果那 自分らしくいられる学校へ
—ジェンダーの視点で子どもの可能性を開く—
古谷 純 子どもの生きる世界をとらえる
—いじめ問題から見ること—
古屋 光 子どもが安心して過ごせる学校
—不登校から考える—
細野 優佳 信頼を育むキャリア教育
—学校外の資源を生かした取り組みに学ぶ—
宮崎 哲史 福祉国家の建設
—労働組合の役割と必要性—
山根 宗大 自己を見つめ直す
—生涯続けられる仕事を選択すること—

平野 耕一ゼミ

- 石川 悠 錯視を用いた児童の表現力や思考力を高める
授業づくりについて
大竹 光 様々な条件で行う放射線量の比較と考察およ
び小学校の放射線教育
大橋 泰弘 自然への関心を高めるための生物模倣の模型
づくり
河合 恵介 同一車両において、あるコーナーにおける理
想の曲がり方をタイヤのグリップ力、路面状
況を踏まえて物理的に考察する
細萱 愛貴 電気分野において、可視化教材を用いた主
体的に参加できる授業について
溝呂木 郁 理科の授業をインクルーシブ教育の視点から
考える

藤本 恵ゼミ

- 郡 飛亮 東野圭吾作品における〈密室〉と〈館〉
曾田 悠斗 『注文の多い料理店』の教材的価値
—児童の反応を中心に—
徳常 美織 絵本「バムとケロ」シリーズの魅力
—サブストーリーを中心に—
水上 和葉 『モチモチの木』の教材価値
宮沢 真帆 重松清が描く子ども
—『きみの友だち』を中心に—
望月 彩乃 角田光代『あなたの子』論
森口 由佳 はやみねかおるの子ども観
—『夢水清志郎事件ノート』シリーズを中心
に—

別宮 有紀子ゼミ

- 伴野良峻・永井康大・中村慎之介
都留市大幡川におけるカジカの分布と物理
的・生物的環境要因との関係
—餌資源と藻類に着目して—
足立 佳子 キャンパス内のシュンラン群落の現状
—個体サイズと開花数及び種子生産との関
係—
南條 新 「つるりん」を訪れる哺乳動物
—学校林を用いた自然教育の意義と可能性—
長尾 泉 アカネズミ (*Apodemus speciosus*) の食痕ボッ
クスの開発と、小学校理科における活用の試
み
上原美波・加藤亜弥
都留の市街地におけるバイカモの分布と環
境要因との関係性

柳 宏ゼミ

- 幡野 萌子 バレーボール競技のパフォーマンス要素の研究
—センタープレイヤーの場合—
中居 杏奈 スポーツチームリーダーの資質に関する研究
—大学女子バレーボール部員が求めるリー
ダーとは—
赤坂 阿美 バレーボールゲームの時系列分析研究
—関東大学女子バレーボール2部リーグの
場合—
齋藤 愛・須永 真実
バスケットボールゲームの時系列分析
—都留文科大学女子バスケットボール部の
場合—
榎 真琴 身体活動量と歩行能力の関係性についての研究
山田 愛 鉄棒運動（前方支持回転）における即時的
フィードバックが学習効果に及ぼす影響に
ついて
西崎さくら ミニバスケットボール競技におけるシュート
パフォーマンスの運動学習効果に関する研究
—フィードバックに着目して—
大嶽 百葉 本学学生の運動部未所属者と本学バレーボ
ール部員の体力の比較調査研究
—新体力テストに基づいて—
友成由布子 都留文科大学学生のC運動者に関する研究
—疎外要因に着目して—

山森 美穂ゼミ

- 村松 慧 ICTのさらなる活用による「天気の変化」のわかりやすさの向上
- 稲垣 通也 小学校における韓国の「科学」と日本の「理科」のちがいを
—両国の教科書を比較して—
- 小畑 歩夢 小学生の好奇心をより喚起するアンモニアの噴水実験
- 田中 良亮 ガラス器具を使用しない小学校理科実験の検討
- 土屋 美菜 植物の香り成分を題材にした小学校理科授業
- 林 優希 図書館資料活用能力の育成を意識した理科の授業
- 伏見 華奈 「月と星」の指導計画と教材開発
—授業時観察の難しさを逆手に取って意欲的な学びに繋げる—

中川 佳子ゼミ

- 大田 純也 J.COSS日本語理解テストを用いた留学生の日本語理解と不安の研究
- 岡本 凌河 発達障害者のストレス解消法の検討
—生活習慣の改善による影響—
- 川邊 岳人 男子大学生におけるアロマ足浴後の生理的及び心理的变化の基礎的検討
- 瀬田川陽祐 大学生の抑うつ傾向と友達関係、ストレスコーピングとの関連
- 田中 良典 ADHD行動傾向をもつ大学生の心的不適応の検討
- 谷村 建哉 男性脳と女性脳の性質の差
- 平山 信 文字情報におけるマンガのジャンルについての考察
- 福島明日香 学習志向性は、学業の成功・失敗経験にどのように働きかけるか
- 藤川 愛子 愛着（アタッチメント）と「甘え」
—内的作業モデルの観点から—

井坂 健一郎（青木宏希）ゼミ

- 伊波明沙香 課外活動で得られる子どもの教育的効果
—ワークショップの実践例から考える—
- 今泉 航 「子どもの主体性を育てる造形活動」
- 宇野 郁美 子どもの発達と絵本
- 林 柚季 塗り絵の教育効果および幼児・児童の絵画表現と塗り絵の関係性について
- 角野 楓菜 図画工作科における鑑賞教育の重要性
- 河野奈津子 「キャラクターから見る子どものニーズ」
- 湊 聡太郎 幼少期における美術的経験が子どもの発達に及ぼす影響

竹下 勝雄ゼミ

- 岩片 麻実 絵に表わす活動における表現技法に関する考察
—小学校から中学校への接続を見通して—
- 角野銀之丞 描くことと情操教育
- 菊池 克哉 新学習指導要領における図画工作科の「共通事項」の指導に関する一考察
—鑑賞活動と表現活動の在り方を踏まえて—
- 幸田ひかる 子どもの主体的な学びを育む漫画表現について
- 前田 和奏 図画工作科における読書感想画の指導のあり方について
- 松島 健太 小学校における子どもの造形的な反応
—学校の環境に対して—

国文学科 平成29年度卒業論文題目

上代文学

井上 夏菜
岩田 明佳
岡 果寿美
奥澤 敦子

木下 智彬
菅野 愛美
高橋 菜摘
滑川 未来
林 頼輝
本多 希
山岡 美咲
渡邊優美香
穴戸 歩美

中古文学

高田明日香
瀬川 智姿

高橋 美咲
村上佳代子

米澤 夏那
鈴木 暢

中世文学

佐々木優士

味澤 汐美
伊藤 陸人

坂口みゆき

橘 芙美

三輪 里子
市川 千遥

近世文学

佐藤 雅
中島 千尋
大杉 瑠香
金子 卓人
佐々木慎子

須藤由梨香

春山 莉穂

松波 伸浩

近代文学

田口ひかる
小坂井紫帆
謝 茁

鈴木 武晴ゼミ

万葉集における季節感
万葉集の怨恨歌
ヤマトタケルの生涯
「思い」のボタン
～万葉歌人から未来に繋ぐ～
上代における女性の立ち位置
持統天皇を中心とした女帝の挽歌
万葉集の中の死の表現
弟橘比売命考
水海贈答歌論
万葉集の雨の歌
上代文学と生薬
古代日本人の死生観
古事記における黄泉国と根堅州国

長瀬 由美ゼミ

『源氏物語』の恋愛と婚姻（前期卒業）
『源氏物語』における女性
一紫の上と明石の君の視点から一
『蜻蛉日記』道綱母の価値観
古典作品における＜継子いじめ譚＞
一『落窪物語』を中心に一
『源氏物語』の女主人公 紫の上と「ゆかり」
『源氏物語』における柏木と女三の宮密通事件の役割

佐藤 明浩ゼミ

西行大峰入りについて
一その時期と経緯を辿る一
風の和歌における色彩表現
十六夜日記の文学性
一紀行文の性格との関わりを中心に一
延慶本『平家物語』における木曾義仲について
勅撰和歌集における季節と時間帯の関わり
一「春のあけぼの」「秋のゆふぐれ」を中心に一
筑波山の和歌
太平記における阿野廉子

加藤 敦子ゼミ

『狭衣衣鴛鴦剣翅』の主題と構想
『伽婢子』における牡丹灯籠の役割
＜物が命あるように動く＞趣向について
元政『身延道の記』における月の表現
『往古曾根崎村噂』増補部分の役割
一長蔵の描写を中心に一
近世子ども向け絵本における「殺す」という表現と描写
『男色大鑑』巻二・一「形見は式尺三寸」にみる西鶴の理想の衆道
『道成寺現在蛇鱗』論
一清姫の描かれ方と役割に着目して一

古川 裕佳ゼミ

梶井基次郎の「欲」（前期卒業）
岡本かの子「金魚撩乱」論
「赤いろうそくと人魚」論

飯塚 優奈
小野寺 悠
川畑 結花
北澤 樹
志村 愛
関戸 奈々

土橋 永暉
滑川 南美
濱中 聡子

近代文学

高倉 浩陽

及川 紗貴

阿部 楓

飯塚 千夏

稲木 淳

夏 力

北道 良美

桑原 勇斗

戸澤 和樹

長谷部真琴

原 夏規

堀内 美里

楨 一機

茂木 直輝

福地 遥奈

近代文学

西中山温音
大石真衣子

加藤 歌織

齋藤菜都子
中山 滯夏
前川 佳奈

望月 真緒

横内 美咲

渡辺 駿児

芥川龍之介「魔術」論
遠藤周作「白い人」「黄色い人」論
吉屋信子「屋根裏の二処女」論
江戸川乱歩『人でなしの恋』論
福永武彦「草の花」論
梶井基次郎「Kの昇天
——或はKの溺死」論
横光利一「日輪」論
山田詠美「蝶々の纏足」論
島崎藤村『破戒』論

野口 哲也ゼミ

「小僧の神様」論
一内包する倫理一
有島武郎『或る女』論
一葉子の生涯に見る人生の可能一
夢野久作「死後の恋」論
一汚れた恋の真相一
三島由紀夫『近代能楽集』論
一「卒塔婆小町」を中心に一
中島敦「文字禍」論
一文字の霊とその禍一
安房直子「きつねの窓」論
一喪失と回復の狭間一
坂口安吾「夜長姫と耳男」論
一無邪気な笑顔と戦いの果てに一
安部公房「薄明の彷徨」論
一濃霧の青春一
武田泰淳「ひかりごけ」論
一忌避された原野一
宮沢賢治『銀河鉄道の夜』
一ジョバンニの「ほんたうの幸」一
「高瀬舟」論
一転換される＜語り＞一
長野まゆみ『少年アリス』論
一曖昧な少年性一
文学の中の社会問題
一昭和初期の作家と小説から一
芥川龍之介「歯車」の断片
一読書遍歴が構築する「僕」と作家「芥川龍
之介」一
「草枕」論
一画工による女の解放一

田口 麻奈ゼミ

恩田陸『チョコレートコスモス』論
太宰治『道化の華』論
一「僕」が描く虚構と真実一
塚本邦雄『青き菊の主題』論
一歌と小説の融合の効果一
谷崎潤一郎『刺青』論
木皿泉論 一『Q10』を中心に一
寺山修二『田園に死す』における＜母殺し＞
一歌集と映像表現の比較考察より一
俵万智初期歌集における恋愛表現の特徴
一「かぜのてのひら」を中心に一
児童文学におけるジェンダー観について
一青少年読書感想文 課題図書を通じて一
村上春樹『スプートニクの恋人』論
一ジェンダーと「2つの世界」を中心に一

田作 岳朗 原恵一作品における〈家族〉とノスタルジー
—ゼロ年代に向かう思想的潮流を背景に—

近代文学 新保 祐司ゼミ

宮本 蒼馬 近代日本文学と武士道
秋山 史歩 安部公房「パベルの塔の狸」論
池戸 看美 近代女流文学の「影」
加納 瑠衣 近代文学における「猫」観
小林あずさ 「坊っちゃん」における夏目漱石の笑い
小林 沙貴 泉鏡花「夜叉ヶ池」論
小松 陽輔 萬朝報論
鈴木 菜生 現代における方言使用
野村 晴香 正岡子規論
尾藤 榛香 宮沢賢治の人間性
—「雨ニモマケズ」を中心に—
宮村 勇輝 近代的自我と内村鑑三の思想
柳谷 勇輝 司馬遼太郎の人物観
吉田 風沙 武者小路実篤論
米山 誠優 池波正太郎「仕掛人・藤枝梅安」論

国語学 古代語 加藤 浩司ゼミ

岩本 真典 重複形容詞について (前期卒業)
市川 春香 古代語における引用表現の結び形式について
入江 結衣 漢文訓読体における強調表現について
廣瀬 絢 「仮名貞観政要」梵舜本・斯道文庫本における漢字音 m・n 韻尾の表記について
森岡 和士 「仮名貞観政要」における「シム」について

国語学 近代語 鈴木 芳明ゼミ

石原 唯 J-POP の歌詞における人称代名詞
内海 佑弥 歌に現れるオノマトペ
柏木 知香 談話における行為遂行的発言
—文末表現としてのガ・ケドを例に—
小林 夏季 やさしい文章の特徴
—子ども向けの文章を参考に—
小林 真美 副詞「とても」の程度副詞化と共起する語
五味 若菜 程度を強める副詞「ちょっと」
柴野 大樹 現代日本語における読点の用法、および使用実態
砂田 綾美 『言海』における稿本と私版本の見出し語の異同
田中 愉己 接頭辞トに対する若者の認識
谷口 紗保 現代におけるマイナス評価出自の程度副詞
中島ひかり 尾崎紅葉の言文一致体
—「二人女房」の文末表現を中心に—
中村 吹希 発話内容別に見る接客言語行動
—文末表現を中心に—
野村 侑生 「させていただく」の使用実態及び認識

漢文学 寺門 日出男ゼミ

古目谷京子 朱熹の『詩経』解釈について
鳥居明日香 李娃伝における恋愛について
錦織 由季 『韓非子』の寓話について

国語教育学 野中 潤ゼミ

青野 秀哉 戦争教材から考える国語教育観
小澤 萌恵 国語教材における家族像
面田真梨子 国語教育における音読
菊池 晴香 国語教育と学校図書館

齋藤 光利 現在の国語教育から見る内容主義と形式主義
佐藤 邦享 思考の形象化による対話的学習の質的向上
竹内百合香 国語教材から学ぶ道徳教育
永田 彩華 21世紀の国語教育における ICT 活用の実践
に関する研究
仲間 夢叶 国語教育と方言
—琉球方言の歴史とこれから—
野崎 葉 国語科教科書採択のめあてと課題
本間瑚都見 挿絵と国語教育
森 公崇 「論理」「論理的思考力」概念及び周辺概念
についての考察
山縣 夏実 ディスレクシア (読み書きの学習障害) と国
語教育
山口 諒 古典教育の方向性

日本文化 菊池 有希ゼミ

小川 将平 大岡昇平『野火』の映画化と視点の問題
小林 弘樹 谷崎潤一郎『春琴抄』論
—記憶が導く物語—
三枝 沙季 乱歩作品に見る「片輪」表象
—『踊る一寸法師』『一寸法師』『孤島の鬼』
を中心に—
酒井 杏子 村上春樹『スプートニクの恋人』における“ス
プートニク”
白樫 千遥 宮沢賢治の芸術論
—トルストイ『藝術論』受容を中心に—
鈴木アイリ 泉鏡花『天守物語』『海神別荘』における異
界観の観察
鈴木 彩香 近代における上田秋成受容
—泉鏡花の小説と溝口健二の映画を軸に—
茅野なつみ 江戸川乱歩文学における『陰獣』の位置
—本格/変格論争を切り口に—
仲川 真由 太宰治『駆込み訴へ』における“ユダ”
—新約聖書との比較を中心に—
畠山 沙樹 遠藤周作『沈黙』における日本の精神風土表
象
満留 悠平 葉山嘉樹におけるドストエフスキー『カラ
マーゾフの兄弟』受容
—ドミートリーになり切れなかった男—
宮永 夏帆 グラフ雑誌としての『明星』

英文学科 平成29年度卒業論文題目

大平 栄子ゼミ

- 石川 姫歌 女性のユートピア世界を描く Begum Rokeya Sakhawat の *Sultana's Dream*
—Virginia Woolf の挑戦と比較して—
板津安加里 *One Piece* にみる人種差別
江本 瑞稀 *Wonder Woman* からみる戦う女性のあり方
小木曾瑛美 アイルランド絵本の啓蒙力
玉川丈一郎 Internalized Homophobia in Japan : A Comparative Study of Gay Culture in Japan and America
望月 雪美 *The Lion, the Witch and the Wardrobe* における宗教概念 —非キリスト教徒の子どもたちへの影響について—
森 カノン 『エリザベス・ザ・ゴールデンエイジ』にみるジェンダー問題
渡部 未侑 男性の美意識
—美容から見るジェンダー観の変遷—

加藤 めぐみゼミ

- 大石 隼 ハーマイオニーの選択
—『ハリーポッター』における階級間移動—
加納真生子 世界のエシカルファッション動向
—イギリスを中心に—
河邊ななみ 第一次世界大戦とイギリス文学
宮子 真琴 イギリス社会の弱者に寄り添うケン・ローチのまなざし
セガトリ クラウドリオ 重貴
戦争詩 —追想と遷移のモダンズム—
白井 佑実 エリザベス 2 世の葛藤と成長
—Public と Private の狭間で—
木曾沙由理 *The Buried Giant* における個人の記憶と共同体の記憶の救済
坂田 佑貴 『1984 年』におけるニュースピークの成立とその効果
佐藤 佳美 「ぼっちゃり」女子の受容
—渡辺直美に共感する女性たち—
進藤 悠里 音楽と文学を超えて
—ウルフが拓いた表現の可能性—
福島由梨乃 Delicious UK —変わりゆく英国食文化事情—
吉川 慶 イギリス映画に見るスポーツと人種差別
若杉 和 英日における男女関係比較研究

竹島 達也ゼミ

- 伊藤夕加里 SWEAT から読みとる白人労働者たちの苦悩
杉山 優子 3つの時代、3つの演劇に生きるゲイの男たち
—*Bent*、*The Normal Heart*、*Take Me Out* を読んで—
五十嵐真央 Aldfred Uhry が見たアメリカ
—“Atlanta Trilogy” より考察—
後藤 春花 サム・シェパードが描く「家族」のかたち
—「家族三部作」より—
坂本 若桜 女性から観たイラク戦争
—*Time Stands Still* 及び *Water by the Spoonful* より—
谷川 千広 hairspray から考察する差別社会
—なぜトレイシーは白人として描かれたか—
廣瀬瑛一郎 戯曲 *Fences* の登場人物から見るアメリカ社会
—トロイ・マクソンが体現する責任と継承する者たち—
山下 夏奈 アレクサンダー・ハミルトンが残したアメリカ
—ミュージカル *Hamilton* が伝える現在のア

メリカ—

- 渡邊 拓矢 1950 年代イギリスの若き労働者階級が抱えた葛藤
—*Look Back In Anger* 及び *Mojo* からの考察—

儀部 直樹ゼミ

- 上田 梨央 『天国の五人』から考える人生の意味
水澤 操澄 ファンタジー×異文化考察
—イギリス・アメリカ・日本における比較とそこからみえるもの—
芦沢 麻結 『もう一日』にみる母の愛と作者ミッチ・アルボムの人生観
遠藤 大珠 現代日本社会の問題点と現代日本人がその中で生きていくべき道についての考察
—ソローの「森の生活」を通して—
大野 大 英語教育の問題点と英語学習法
木村 安奈 日本人の英語発音に対する学習観と発音能力
酒井 活 高校教科書におけるトピックについて
品澤あゆみ 『エデンの園』に見るヘミングウェイのエロティシズムとフェミニズム
末永 周平 *The Great Gatsby* とジャズ・エイジの芸術思潮
中市祐伊菜 ポオの作品における動物の象徴性
野田 真由 ミッチ・アルボム 3 作品からみる人生
花輪 秀 英語小説からみるファンタジー文学の暗黙の了解と社会的普及
平井あゆみ 『ライ麦畑で捕まえて』 —作品に隠された意味—

鷺 直仁ゼミ

- 高嶋理恵子 イギリス、日本、他各国と比較したアイデンティティや思考の違い
高杉あづみ クラシック音楽と西洋文化
寺田 祐奈 イギリスの貴族文化
中原その子 Diego Velazquez “Las Meninas” とその時代
田村 文佳 タータンチェックとスコットランドの関係性
箱崎ちひろ 世界をつないだイギリスについての考察
—イギリス帝国とアジアから読み取る—
福田 夢華 ラファエル前派と 19 世紀の女性
星谷 智美 英国パブ文化について
村上 佳菜 英国女王の変容と文学
—The Change of British Queen and British Literature—
百瀬 真衣 印象派の女性達
山路 菜緒 西洋の色彩 —青のもつ力—
大賀 隆平 宗教における死生観
—宗教とはなにか、その原理とは?—

中地 幸ゼミ

- 大瀧 葵 *Obasan* から見る日系カナダ人の差別と世代間による葛藤について
立石和佑子 ハリー・ポッターシリーズからみるイギリス階級社会の歴史と現在について
伊藤 優花 *The Buddha in the Attic* から読み解く写真花嫁の背景
川島美由希 Jessica Kawasuna Saiki の作品から見るハワイにおける日系アメリカ人の人種問題
久保田真由 *Adventures of Huckleberry Finn* からみた人種差別
中澤 涼介 The Practicality of Participatory Budgeting at a Municipality Level in the United States
平山 直樹 Achebe の *Things Fall Apart* における親子関係

- 松沼 颯太 *Autobiography of Black Hawk* から考える復讐
三池 真由 内村鑑三の *How I Became A Christian* から見る日本人にとってのキリスト教
山口 啓 *Ann of Green Gables* を支える二つの因子

今井 隆ゼミ

- 友水 オースティン 大地
Frequency and Generation of Meanings of Songbirds, and its Application to Human Infants
石塚 雄也 The Effect of Oxymoron
及川 歓奈 Communication Skills in Mammals and Birds
小川 和 Change of the Language: from Past to Future
加藤玖瑠実 Influence and Difficulty of the Mother Tongue in Japanese Learners' Acquisition of English
菊池 太河 How Do Children Acquire Language?
寶田 歩未 Autistic Children and Normal Children in Second Language Acquisition
堀口 幸秀 Children's Acquired Knowledge Shapes the Way They See Objects

福島 佐江子ゼミ

- 岡崎 梨乃 日米間の謝罪表現における考察
—ポライトネスの観点から—
後藤 加奈 An investigation on politeness theories
後藤 祐香 映画『マイ・インターン』におけるポライトネス
佐藤 太地 ポライトネス理論から丁寧さを考える
小関 有佳 発話行為と発話解釈のプロセス
榊 彩香 中間言語語用論における一考察
佐々木七彩 英語教育と語用論
—ポライトネスをどう教えるか—
新津 岬 ポライトネスの観点から見た「断り」表現
藪内 考徳 推論と言外の意味に関する一考察
吉田 一瑛 ポライトネス理論と対人コミュニケーション

三浦 幸子ゼミ

- 佐古佐恵乃 Analyzing Receptive and Productive Vocabulary in a Junior High School Textbook
中村 結 Applying ESD to English Classes at Secondary School
山田 千尋 Assessing English as a Subject at Elementary School
賀佐 憩 Considering Affective and Social Factors Influencing Group Work in Junior School classroom
喜屋武賢樹 Exploring English for Specific Purposes Focusing on Occupational Purposes
中瀬 翔太 Assessing Listening Focusing on Validity and Authenticity
中村 真士 A Study on Fluency in L1 and L2 Reading
中村 優太 Considering Grammar Teaching to Improve Learners' Communicative Competence Focusing on "Use"
沼田 瑞生 Exploring Activities and Assessment for Teaching Writing in Elementary School English classroom
伏江 智遥 Significance of Discourse Competence in Paragraph Writing
最上垂太夢 A Study on Deep Active Learning

奥脇 奈津実ゼミ

- 岡田 楓 日本人英語学習者による英語前置詞 in の使用傾向と誤用特徴
金丸 彩香 小学校外国語活動の指導上の課題と中学校英語教育への接続について

- 川野真由美 第2言語が与える母語への影響について
—ストループ課題を用いた検討—
鈴木 茜 インドネシアの日本語教育の現状および学習者の日本語学習に対する意識調査について
竹田 夏生 The effectiveness of vocabulary learning based on thematic clustering representing academic fields by Japanese EFL learners
池下麻里奈 大学生の日本語における性差意識に関する調査
石沢 優太 Investigating the use and comprehension of modal verbs in English by Japanese EFL learners
大原 昌也 ヘヴィメタルの歌詞における語彙的特徴
越智 覚史 協同学習における学習者への心理的な利点について
神鳥 佑輔 単語記憶にスキーマが与える影響
—学習者の英語習熟度による違い—
須藤沙璃南 第二言語学習者の語彙理解に見られる和製英語の影響
外山加奈子 外国語理解における視覚情報と聴覚情報が果たす役割
中村 知夏 色彩語が表す連想イメージの比較
—日本語と英語とカタカナ表記の違い—
西村 魁人 中国人日本語学習者における受動・使役・時制表現の習得について
古田 果鈴 言葉の発達とオノマトペの関係
望月 菜央 英語字幕の有用性
—日本人英語学習者のスピーキング能力を高めるために—

Hamish Gillies ゼミ

- 浦野 幹人 Language learning strategies: Investigating strategy use among Japanese undergraduate students
加藤 諒 Exploring strategies for creating a motivational environment in the Japanese High School EFL classroom
小出水康平 Thinking of solutions to Japanese students' English proficiency deficit from the point of view of motivation
酒井 祐果 English Education for Learning Disability Students in Japan: A Narrative Inquiry of One Teacher's Experiences
中込 秋実 Essential identity and created identity in different societies: A comparison of exchange students in Japan and the United Kingdom
栗原 有里 Proposing a new style of museum taking into account the current Japanese phenomenon of youth disinterest in museums: A comparison with Korea
鈴木 小雪 An International Comparison of MALL (Mobile Assisted Language Learning): the Effects and Possibilities among University Students in Japan and Other Countries
千葉友利永 Acceptance of LGBT students in Japanese Schools
橋本 由佳 Why Danish People Have a Good Command of English: Focusing on Compulsory Education
本間 朱夏 Investigating the future L2 selves of Japanese high school and university learners of English
森本 真衣 Are There Dual Personalities in Bilinguals?
横田ゆきの Media Technology as a Tool of Second Language Acquisition

社会学科 平成29年度卒業論文題目

現代社会専攻

現代史 菊池 信輝ゼミ

- 田邊 拓也 日本ファシズム論の再考
荒山 遼太 教育における男女平等の実現
—「隠れたカリキュラム」を克服するには—
安藤 護 片山内閣の形成過程
—戦前の片山哲・芦田均の動向から—
加古 達也 若槻礼次郎と憲政会
—解散総選挙への道—
権代 峻佑 日本国とアメリカ合衆国との間の相互協力及び安全保障条約第6条に基づく施設及び区域並びに日本国における合衆国軍隊の地位に関する協定（日米地位協定）第17条から見る改訂の是非
—1995年の事件をもとに—
柴田富士雄 現代日本の捕鯨言説
—その変遷と構造—
塚越 歩 東宝戦争映画に見る歴史観の変遷
持平 房宣 iPhone市場シェアに関する考察
山田 陽子 見えない女性の貧困とその支援のあり方について
協田真保香 子ども観の変遷について
—児童文学による考察から—

地方自治論 安達 智則ゼミ

- 生駒 一輝 少子高齢化社会の現代的貧困研究
—雇用労働からの貧困解決—
江野 景太 個性を創りだす 景観行政と都市計画
太田香乃子 大都市東京における自律分散型エネルギーシステムによる自治体形成
勝又 彬 “第4次産業革命”の進行による社会と人間のリスク問題
川合 葉月 共存する聖地とまち
—日本における聖地創造のメカニズム分析—
橋田 留美 「空き家問題」解決に向けた自治体政策の有効性
久保寺一輝 社会技術論から考える甲府市の防災行政改革
小林 侑布 情報社会における新まちづくり創造
中川 拓也 グローバル社会における農村再生と地域ブランド戦略
水野 稜貴 伊豆地域のエートス
—歴史から考察する未来型開発—
八木 大海 音楽によるまちづくり

現代政治論 進藤 兵ゼミ

- 石村 鴻星 地方都市における「創造都市」のもつ可能性について
木内 綺音 医療行政の改革課題に関する研究
—群馬県の子どもの医療費無償化を事例として—
田中友希子 地域産業における自治体・中小企業の役割と課題
浅野 匡俊 陸上自衛隊駐屯地の性質と役割
安藤 優菜 男女ともに働きやすい社会にするために
—男性の育児から考える日本のワーク・ライフ・バランス—

- 小野寺晴香 若者の就労支援政策の変遷
—日本とドイツを比較して—
栗原 耕平 横断賃率論争の検討
—横断賃率論とその「批判」—
藏田 清楓 NPOのアドボカシー活動研究
小林 鮎実 奨学金に関する諸問題についての考察
—日本学生支援機構の制度や運営を中心に—
清水 慧 地方の人口問題
田原 航介 人口減少社会における公共施設・公共サービスの維持管理
千田新之輔 地方農村の活性化
—平泉町における世界遺産利用のまちづくりと内発的発展—
深澤日菜子 なくなっていく理由の原因追求並びに早期発見のために
—これまでの事件や外国の取り組みから学んで—
山岡 美月 在日外国人と地域社会に関する考察
—静岡県浜松市のブラジル人（コミュニティ）を事例として—
脇谷絵梨香 大分県と観光業
江川 容平 翻訳の特殊性が与える影響

社会哲学 黒崎 剛ゼミ

- 畔上 友里 日本における生涯学習に関する考察
—学習権の視点から—
有賀 未美 日本における笑いとその社会的意味について
坂巻 郁哉 世紀末な資本主義と正義の原理
杉原 惇彦 ポピュリズムと代議制民主主義
—2016年東京都知事選挙を事例に—
田中 優人 カントの「人倫の形而上学の基礎づけ」における道徳に関する考察
内藤 建 日本における単純売春の犯罪化について
永田 明 シェアリングエコノミーの進展
早川 雄貴 企業倫理について
—企業倫理の登場の背景および企業倫理の今後の展開について—
保延 宏明 何故、死ぬまで働き続けるのか
茂木 彬礼 ニーチェから考える人間の生き方
山本耕太郎 「主人と奴隷の弁証法」からみる現代の労働社会
山本 陽也 自己と他者
—「良い人間関係」とは何か—
緩詰 士朗 これからの日本における、安楽死の在り方について

企業経営・労働とジェンダー 野畑 眞理子ゼミ

- 加藤 七瀬 女性像の変遷
—朝ドラのヒロインに投影する日本女性を読む—
木村 星斗 日本企業におけるディーセント・ワークに関する一考察
—派遣労働における諸問題に着目して—
小谷 瑞起 少子化の要因に関する一考察
高橋未瑠美 LGBTの研究
—セクシャル・マイノリティにおけるLGBTの現状を読み解き、性の多様性の可能性を探る—
都築 彩子 職場におけるメンタルヘルスの諸問題

夏目 湧斗 日本経済の変遷と女性労働
 馬場 楓 男性学の研究
 内田かなえ 女性の貧困問題
 —可視化されない貧困に苦しむ女性たち—

環境法 小島 恵ゼミ

石原 卓弥 災害に強い内発的まちづくり
 会津 泰嗣 持続可能な水利用と水質保全
 表 修平 生物多様性の価値 —生物遺伝資源—
 神戸 優希 持続可能なまちづくり
 —経済的利益と環境配慮の両立、住民参加—
 坂 将汰 水俣病の補償における問題点とよりよい補償
 真 遼太郎 地球温暖化と地域の取り組み
 —再生可能エネルギーから考える—
 高橋 直也 都市景観保全の到達点と課題
 竹内 寛晃 再生可能エネルギーの取組と現状の日独比較
 野田友里絵 景観対策の事例と日本人の景観認識
 村田ひかり 水俣病と責任論 —国と県の責任—
 吉村 佳典 企業による環境と経済のための持続可能な経営

生涯学習論 富永 貴公ゼミ

伊東 真輝 駄菓子屋の教科横断的活用
 植田 聖来 女性教師のライフヒストリーから学ぶ学級経営
 大久保一輝 合唱活動における指導者の実践
 —学習者の動機付けを中心に—
 大越優美江 ALLY はなぜ ALLY になったのか
 —LGBT 教育の新たな展開に向けて—
 奥谷 侃太 公立夜間中学における教師の実践と特徴
 —学習者の動機づけにかかわって—
 北村 雄佑 映像授業における講師の教育技法の特徴
 —学習者とのコミュニケーションの視点から—
 雲井 久 総合型地域スポーツクラブの現状と課題
 —大月市健やかスポーツクラブを事例に—
 黒澤 巽 動物介在教育(AAE)の意義
 —教育の場における適用に向けて—
 佐藤 将太 食育プログラムにおける子どもと保護者の学び
 山越 穂菜 世界遺産のない地域における世界遺産教育の意義
 —ユネスコスクールの実践から—
 吉田 巧弥 スポーツによる地域活性化
 —学校と地域の連携に着目して—

日本経済論 堀内 健一ゼミ

後藤 壮登 現代日本の租税規律の低下について
 —原因と改善策—
 大原光太郎 外国人投資家の影響力
 —日本企業に与える影響について—
 佐藤 春子 日本における SNS 利用企業の経済効果
 —それが日本に与える影響について—
 仙田 創太 少子高齢社会における介護ビジネスの可能性
 田村 志帆 日本の働き方
 —格差と同一労働同一賃金から考える—
 奈良 彩希 山梨の農林水産物輸出における持続可能性
 西村 昌紘 日本電機メーカーの再興
 平林 明 整備新幹線の開通が地域経済に与える影響
 —北海道新幹線を題材に—
 藤井 昂 中国の経済発展と格差問題
 宮脇 慧 日本が安定的な経済成長を達成するために
 —イノベーションによる経済成長—

山崎 郁歩 日本経済における移民の積極的導入
 —介護分野における新制度の確立—
 吉田 真子 教育格差緩和に必要な財源獲得方法

憲法 横田 カゼミ

宮崎 幹 人間の尊厳から見る現代の労働環境の在り方
 大場 有佳 個人の尊厳と両性の本質的平等

環境・コミュニティ創造専攻

環境教育 高田 研ゼミ

森本 楓 食を主題とする「いのちの教育」の再検討
 赤池 諒子 上野原市周辺における狐つき
 伊藤 風美 「いのちの教育」の実践について
 浮島みづき LINE スタンプを用いたコミュニケーション
 —若年層と老年層の比較—
 奥山 夏葵 中一ギャップ解消プログラムの比較と展望
 —青少年教育施設における実践から—
 小俣 溪和 学校林の成り立ちと現状からみる課題
 楠間佑侑至 山梨県上野原市立上野原小学校を事例に
 一体罰の研究
 —山梨県下における意識—
 倉屋 彩月 小中学校における発達障害児の支援計画の組
 み立てについて 愛知県の事例から
 —ニーズに合わせた支援とはなにか—
 鐵 多聞 柔道における安全対策について
 —これからの課題と事故後の支援—
 酒寄 真成 大学自治の歴史と変遷
 —大学法人化を事例として—
 櫻本 晃基 学校給食における食農教育の課題
 —小平市立小平第六小学校を事例に—
 高橋 綾音 復興教育の現状とこれから
 —岩手県を事例に—
 長坂 悠也 「プロジェクト・アドベンチャー」が学校教
 育に与える影響
 中澤 杏樹 小学校における森林環境教育の実態
 —山梨県内の実践校の事例から—
 舟久保晴基 地域社会の変化に伴う祭りの移り変わり
 —富士吉田市、向原地区のおかたぶち講を事
 例として—

地域経済論 両角 政彦ゼミ

崎野 桃佳 福岡市の人口増加とその要因
 雨宮 瞬哉 甲州市におけるワイン産業による地域活性化
 上田 聖瑠 クラインガルテンの活用による地域への影響
 —山梨県南アルプス市での取り組みを例に—
 岡野 桃子 群馬県高崎市における農産物直売所の事業展開
 奥 湧一郎 北陸新幹線の金沢開業による観光地の変化と
 その地域差
 河口 蒼 燕市洋食器産業における支援組織とその有用性
 近藤亜々駆 静岡県富士宮市における地域特産物を利用し
 た地域活性化
 高田 賢仁 高尾山観光による地域経済への効果と対策
 望月 達史 ヴェンフォーレ甲府の事業展開とスポンサー
 との連携が地域にもたらす経済効果
 望月 優斗 ヴェンフォーレ甲府のホームタウン活動にお
 ける地域貢献とその課題

農山村再生論 増田 直広ゼミ／福島 万紀ゼミ

- 吉川 巧海 移住者と農山村住民の相互関係性
— 一島根県仁多郡奥出雲町蔵屋集落の事例—
- 古俣 恭兵 中山間地域の消防団の現状と課題
— 都留市・道志村を事例に—
- 中川 真希 森林の多面的な利用による林業の活性化
— 3つの団体を事例に—
- 成川明日香 アニメ聖地巡礼と地域活性化
堀内 大地 日本における木質バイオマスの普及に向けた課題について
— 日本と欧州との比較から—

環境社会学 平林 祐子ゼミ

- 内山 倫太 木質バイオマス発電に伴う林業再生の可能性
— 大月市を例に—
- 木村 友弥 獣害問題における「地域ぐるみ」対策の実態
黒澤 晴輝 エコポイント制度導入がごみ分別に与える効果
鈴木茉莉子 道の駅事業と地域産業の現状と課題
— 道の駅が一次産業に与える効果と今後の可能性—
- 増田 美穂 原発事故が農業に与える影響
— 福島県飯館村を事例に—
- 菊池 佑太 小網代における保全の地域経済への影響

地域環境計画 渡辺 豊博ゼミ

- 浮田 麻衣 静岡市の中山間地域における振興の現状と今後の在り方
- 勝山 真妃 三町商店街活性化における商店街と地域の在り方
- 加藤 由菜 富士山を活用したまちづくり
— 静岡県富士市を例に—
- 工藤 美咲 静岡県富士市におけるコンパクトシティ構想の活用と課題
— 富山県富山市と石川県金沢市を事例として—
- 後藤 美希 自然体験活動が参加者に与える影響と新たな取り組み
— グラウンドワーク三島とがじゅまる自然学校を事例として—
- 早川 真衣 在日外国人と地域の防災サポート体制について
松浦 美月 観光まちづくりによる富士市の地域活性化の在り方
- 山本あい架乃 「道の駅つる」を事例とした住民参加活動の現状とその効果
— 全国モデル栃木県茂木町「道の駅もてぎ」を比較対象として—

都市環境設計論 前田 昭彦ゼミ

- 今村 遥香 上野原市の登録有形文化財「旧大正館」の抱える課題と今後
- 王 宏霖 瀋陽市伝統的建築の保全と利用
佐々木杏奈 自治体による同性パートナーシップ制度の成果と課題
- 高橋 萌絵 民泊ビジネスの現状と今後の展望
田中 七虹 富士吉田市における郡内織物の取り組みに関する研究
- 富田 勇樹 都市計画法第34条11号などに関する市町村の規定とその現状
— 埼玉県市の市町村を事例に—

- 松木 伊織 戸建住宅における環境性能
— 先進設備と断熱の観点から見る真のエコハウスの姿—
- 葉袋 結捺 廃校舎問題
田川 幸汰 道の駅の災害時対策の現状課題に関する研究
— 岩手県内の道の駅を対象として—

地域社会論 田中 里美ゼミ

- 岡部 貴洋 公共交通とまちづくり
椎名 朱里 松本山雅FCによる地域貢献活動の可能性
天童 寛太 男性の育児参加の有用性
平井 万裕 地域振興における道の駅の果たす役割
— 「伊豆ゲートウェイ函南」を事例として—
- 増尾なみき 障害者の雇用拡大を目指して
— 高齢者との協働の可能性—

比較文化学科 平成29年度卒業論文題目

伊香 俊哉ゼミ

- 小田 光軌 ドイツ市民から見たユダヤ人迫害
 笹井加奈子 現代における若者雇用問題
 佐藤 郁美 韓国における日本の大衆文化
 瀬川 恵美 なぜ、こども兵士が存在するのか
 藤代 志穂 沖縄戦での日本軍と住民
 三田紗弥香 「売買春」の歴史

志村 三代子ゼミ

- 阿部 汐里 メディアの中のハワイ
 —大衆文化が形成する「楽園」イメージ—
 植野 渚沙 『裏窓』の研究
 小澤 希美 『風の谷のナウシカ』における信仰
 見城 真紀 戦時下、占領期における映画検閲
 —2つの『無法松の一生』の比較分析—
 佐々木春乃 映画『ハリー・ポッター』シリーズからみる
 音の使われ方
 関 香澄 映画女優・若尾文子
 ～美少女から大女優への変遷～
 中村 純 ゲテモノ映画から怪獣映画の頂点へ
 —ゴジラシリーズの変遷について—
 松島 晃太 『仁義なき戦い』シリーズを人々はなぜ受け
 入れたか
 松原 永 『モダンタイムス』と『独裁者』から見る社
 会風刺
 松岡総司郎 The Report of the Dead

山本 芳美ゼミ

- 藤原 千晶 睡眠不足
 —1880年代以降の新聞記事から検討するそ
 の概念の変遷—
 稲葉 紗波 現代日本の不妊治療をめぐる言説の分析
 近藤 由菜 評論家から見た日本における洋装下着論
 青木英夫、鴨居羊子
 —女性たちは何故ブラジャー、パンティーを
 選んだのか—
 嵯峨なつみ 手元供養
 —故人崇拜か個人崇拜か—
 澤田 朱音 日本社会と中小企業の開業廃業の相関
 塩谷 奈央 海外みやげ
 —「らしさ」の演出—
 砂長谷莞名 現代日本における自宅出産
 中野 美琴 現代日本の墓事情
 —変化する「無縁」—
 星野まどか 遠野市のまちづくり
 —『遠野物語』と観光と—
 武藤 彩歌 新たな辻の再生に観る民俗学的思考
 —福島県須賀川市「結の辻」の事例から—
 山岸 明生 メンズブラジャーを紐解く
 —データ分析と考察より—
 吉田 舞子 若年性認知症者の現状と認知症カフェ
 —山梨県と青森県の取り組みから—
 和田 朋子 目屋マタギの狩猟風俗の変遷
 —弘前藩との関連を軸に—

邊 英浩ゼミ

- 福尾 彩 働くこととは何か
 —日本と中国を中心に—
 佐々木基安 東アジアにおける外国人労働者
 —韓国と台湾の事例を参考に—
 小池 千春 日韓の敬語比較
 安井 麻衣 韓国における日本語教育
 橋口友美子 恋愛・結婚観について
 結城 美咲 日本人を縛りつけるもの
 加藤 佳穂 オペラ『蝶々夫人』から見るジャポニズム
 —“日本らしさ”の形成—
 尾形はづき 文化資本と「学び」の関係性
 後藤 竣 日本の体育会系部活動
 吉田はるか 『Happy』から『Well-being Community』へ
 木俣 祐資 沖縄における基地と観光産業について
 趙 雲騰 『三国志』から『三国志演義』をみる
 石川 桃子 訪日外国人と観光産業

水野 光朗ゼミ

- 安銀 実 在日外国人とその子供たち
 青島 正道 日本の私鉄について
 常 丞 日本のゲーム産業について
 小谷 勇人 仏教と日本の葬儀

内山 史子ゼミ

- 田邊 彩 マレーシアにおけるハラール食品産業と日本
 企業のハラールビジネスの拡大について
 岩淵 徳盛 シンガポールと東京の都市政策の比較
 —コンベンション都市の観点から—
 伊藤 達矢 スマトラにおける人喰い風聞
 王 晔 龍 マラヤにおける中国系住民の帰属意識の変化
 児玉 未来 インドネシアとフィリピンの開発独裁体制の
 比較
 小林美早紀 インドネシアにおけるイスラームの『商品化』
 とイスラーム書籍市場拡大
 知見 采紀 フィリピンの児童労働
 山口 千晴 フィリピンとシンガポールの学力の比較
 —教育制度の変遷から—

岩崎 正吾ゼミ

- 宮下ひかる ミャンマー人大学生の進学事情と学校外時間
 の過ごし方
 宮田 紀菜 ニュージーランドにおける先住民族の在り方
 —ワイタング条約とマオリ教育から読み解
 く—
 石川 莉子 アメリカの黒人の歴史とブラックミュージック
 —人種差別との戦いの中での黒人音楽の役
 割—
 熊谷 沙月 非正規雇用の増加の要因と抑制
 —日本の就職形態について—
 小林 知加 人を魅了するプレゼンテーション
 —TEDトークから考察する—
 佐々木 望 幼児教育が人格形成に与える影響
 —映画「ちいさな哲学者たち」から考える—
 瀬藤 歌葉 イギリスにおける子どもの人種意識の発生か
 ら見る移民教育
 —エスニック・マイノリティに注目して—
 田嶋 郁美 幸福度の視点から考える日本社会
 —デンマークの取り組みを中心として—

- 野口なごみ スイスの国防意識との比較から考える日本のこれから
- 野口 椋 日本におけるLGBTの現状とこれから
—教育現場における課題—
- 東別府 翔 先住民との共生における課題
—ニュージーランドにおけるマオリ語教育に着目して—
- 巻口 耕平 食と健康の関係性
—身体的健康に焦点を当てて—
- 横山 歩実 現代における死のとらえ方
—日本とルーマニアのサプンツァ村を比較して—
- 小野絵里沙 自治体における「優しい日本語」の有効性の考察
—外国につながる市民への防災対策と日本語話者への効果—
- 勝野 弘太 消滅可能性都市大町市
—故郷の未来を考える—

分田 順子ゼミ

- 岩森 優芽 若年無業者の自立支援
—「働かざる者食うべからず」に縛られない社会を目指して—
- 浦川早紀子 移り行く寄せ場地域
—貧困状態にある人々への支援活動に学ぶ—
- 國澤 優花 「地域に子育ての互助空間を切り拓く」
—子ども食堂が提示する可能性—
- 倉坂 恵子 日本における「ピアノ教室」の展開
—ピアノ学習者の進路に着目して—
- 塩田 真子 児童虐待問題への介入とケアを見つめて
—何が当事者の孤立を生むのか—
- 清水わかな 女性高齢単身者のリスクと住環境
—コレクティブハウジングによるコミュニティ形成に着目して—
- Dinh Thi Mai Huong (ディン ティ マイ フン) 外国にルーツを持つ子どもの高校進学に関する教育課題
—神奈川県における高校入試の特別枠を中心に—
- 中原 千晶 在日外国人に向けた図書館の取り組み
—多文化サービスの充実を中心として—
- 前田 理沙 メンタルヘルス問題から考える日本人の働き方
—企業によるメンタルヘルス対策とワークライフバランス—
- 森 雅恵 性産業で働く若年女性の貧困
—家庭と社会から切り離された女性たち—
- 坂口 優羽 秋葉原の「おたく」文化とアイドル

白川 耕一ゼミ

- 石黒 文菜 ケベックにおけるインターカルチュラルリズムとライシテ
—多文化コミュニティがあるべき姿とは—
- 駒津 佳子 観光促進と環境保全の関係
—イギリス・日本・長野の事例—
- 井上 航輔 ドイツにおけるドイツ国民と移民の関係の変化とその背景
- 岩井 彩乃 第二次世界大戦後のロマとヨーロッパ
- 大松 孝也 日独戦後和解政策の比較
—日韓諸条約とルクセンブルク協定を事例に—

- 古佐小剛士 日本の漫画文化の発展の可能性
—メディアアートと漫画の融合による一考察—
- 佐藤 拓也 ゲッターでの生活
—追放されるユダヤ人—
- 鈴木ひかり 元日本軍「慰安婦」の経験とこれからの課題
—日本と韓国の合意までのすれ違い—
- 高松 紗希 日本の体験型観光 —和菓子作り体験—
現代日本社会におけるパワースポットについての一考察
- 夏堀智菜美 エジプト最後の女王
—クレオパトラの実像—
- 村山 勝哉 ナチ時代における反ユダヤ主義宣伝
—宣伝と国民の反応—

大辻 千恵子ゼミ

- 原田 汐梨 多様なジェンダーアイデンティティの容認にむけて
—ひとりひとりが尊重される学校—
同性カップルが親になるということ
—日本と諸外国の現状—
- 南 結菜 フランス公教育と「移民」の子どもたち
—共和国理念と「平等」—
- 竹澤 冴華 日本におけるドメスティック・バイオレンス根絶に向けて
—先進的なアメリカの取り組みから考える—
- 佐野 滉一 ネイティブ・アメリカンと環境正義
—ナバホ族とウラン開発を事例にして—
- 中村あゆみ 日系アメリカ人二世ダニエル・イノウエの生涯
—偏見克服と平和構築への尽力—
- 宮下 彩 偏見・差別とたたかう 日系アメリカ人 ジョージ・タケイ
—俳優として、市民活動家として—
- 宮澤 理沙 世界文化遺産の保全と観光
—フランスの成功とこれからの日本—
- 中野 遥香 日本の働き方とワーク・ライフ・バランス
—先進的な企業の実例から考える—
- 氷見佳那実 日本における性教育再考
—性教育先進国を目指して—
- 大塚 有稀 日本統治下の朝鮮植民地図書館
—教育と文化による統治を考える—
- 宝田 樹里 「まち」に根付く図書館を目指して
—教育大国スウェーデンから学ぶ—
- 樋口 知花 外国人技能実習制度と過酷な労働実態
—守られるべき実習生たちの人権—

佐藤 裕ゼミ

- 原田 知佳 日本からの南米移住と定住者コミュニティの形成に関する歴史社会学的考察
—ボリビアを事例として—
- 松崎 彩奈 アボリジニ・アイデンティティの変容
—差別、同化政策、社会運動の相互関係に着目して—
- 三浦 和幸 オランダの「寛容性」の転換
—柱状社会の変遷とイスラム移民の関係に関する社会学的考察—
- 橋本 恵歌 子どもの主体性を育む初等教育とは
—フィンランドの経験に見る教育社会学的考察—

- 皆瀬 優星 近代化過程における蚕糸産業と女性労働
—長野県諏訪地域の社会史—
- 欠端 杏佳 母子家庭にみる貧困の世代間再生産
—就労の社会的制約と保障政策のはざま—
- 小泉 春奈 変わりゆく貨幣の形
—金銭貸借を手がかりに—
- 齋藤 恵愛 滞日外国人女性の子育てにおける困難とその支援
—フィリピン人シングルマザーに焦点をあてて—
- 竹腰 響 地方都市における伝統儀礼の継承と地域住民
—富山県の獅子舞を事例として—
- 田畑 結生 働く女性のキャリアアップをめぐる現状
—再生産役割と職場のジェンダー規範からの考察—
- 濱田 早紀 エスニック料理店の店名とアイデンティティ
に関する言語社会学的研究
—徳島県を事例として—
- 増田 潤也 EUの不均等発展と「移民／難民問題」の考察
—ポーランドを事例として—
- 三原 広己 観光による地域活性化と内発的発展の可能性

岸 清香ゼミ

- 小澤 桃香 地域をデザインする
—上古町商店街と hickory03travelers による「温“古”知新」の理念と実際—
- 金 碩鴻 漱石を読む
—旧制高校生における教養主義の隘路—
- 今野 美夢 犯罪表象が社会を動かす
—小説・映画『手紙』と加害者家族の現在—
- 菅谷 茜 世界遺産の観光資源化とその功罪
—富士山における自然・歴史・地域共生型エコツーリズムの可能性と限界—
- 菅原 優菜 震災文学の誕生
—〈仙河海サーガ〉における「ふるさと」の再生—
- 杉原 詩織 反戦を叫ばない戦争マンガ
—『夕風の街 桜の国』における声なき声の波及—
- 松本 杏奈 現代日本の写実絵画
—ホキ美術館による「存在の凄さ」の共有—
- 山田 壮大 社会に訴えるロック
—ブルーハーツと「落ちこぼれ」が提案する生き様—

文学専攻科 平成29年度研究論文題目

佐藤 隆先生

- 逢坂 佳希 小学校社会科で学ぶ歴史分野の授業作りの一考察
- 竹岡 美帆 人間的成長を目指す音楽活動
- 中飯田真依 これからの小学校外国語活動・外国語のあり方

大学院文学研究科 平成29年度修士論文題目

国文学専攻

牛山 恵 先生

- 天野 美加 翻訳文学の魅力と特性を活かした授業づくり
—中学校国語教科書を中心に—
- 立花 大樹 ことばの教育における「遊び」の可能性
—「ことば遊び」に焦点を当てて—
- 渡辺 佑 山梨県の文学作品を活かした教材化の可能性
—中学校・高等学校の国語教育を中心に—

野口 哲也 先生

- 板花 怜実 内田百閒『旅順入城式』論
—「前掲ノ七篇」に注目して—

英語英米文学専攻

三浦 幸子 先生

- 荒井 康耀 Exploring the Factors Affecting the Changes of Japanese English Learner's Motivation
—A Self-Determination Theory Analysis—

儀武 直樹 先生

- 鈴木 圭祐 A study of Emily Dickinson's life and passion for her poetry in the early 1860s

中地 幸 先生

- 早川真理子 Between Japan and America
—Kibei-Nisei's identity in John Hamamura's Color of the Sea—
- 宮田 真澄 Traumatic Experiences during World War II
—A study of Chang-rae Lee's A Gesture Life—



2017年国語国文学会主催講演会

セーラームーン／ハルヒ／ラブライブ！ から眺める三島由紀夫

開催：平成29年11月8日(水)
講演者：千田洋幸氏

～“オタクの祖”とは誰か～

ラブライブ！の映像が流され、会場の照明がすべて落とされると、ペンライトがゆれるアリーナと2101教室がひとつになった。千田洋幸先生が「これをやるために今日は都留に来た」とおっしゃっているのだから、もちろん止めるわけにはいかない。都留文科大学国語国文学会の歴史に汚点を残すことになるかもしれないという不安と、画期的な出来事として語り継がれる伝説になるかもしれないという期待が、教壇の脇の入口近くに陣取った私の心で交錯した。

講演会は、日本において「カルチャー／ポップカルチャー」の領土がいかに変質しているかという話から始まった。文学が純文学と大衆文学とに棲み分けられていた時代は終わり、アニメ・ゲーム・映画・マンガ・ライトノベル・音楽・美術などが等価に配置され、孤独と不安にさらされた個人が自分を支えてくれる小さな世界に引きこもり救いや癒しを求める時代。そんな「個人の総オタク化」の時代に、1980年代以降の日本が立ち至ったというのが、千田洋幸先生の見立てである。だから続く現実世界への忌避感が、「偽史」「時

間ループ」「パラレルワールド」等、「ここではない・もうひとつの世界」を現前させる物語を流通させた。

ところが現在、AKBやももクロなどのアイドル文化に象徴されるように、コンテンツ創造のあり方が大きく変容しているという。ひとことで言えば、創作の側／受容の側の双方でアニメ世界とシンクロする新しい身体概念が創造されているということだ。聖地巡礼し、コスプレするオタクの身体が息づくのは、前世紀末の日本において希求された「ここではない・もうひとつの世界」ではない。言わば、「いまここにある・もうひとつの世界」である。そしてラブライブ！の映像が2101教室に

現出したのは、声優アイドルという2次元+3次元のハイブリッドな主体に熱狂するオタクたちの身体の2次元の映像であり、それがまた、都留文科大学の学生たちが座る3次元の世界と地続きになった。言わばあれは、2.5次元の講演エンターテイメントだったのだ。

国語教育も文学研究も、アニメ・ゲーム・映画・マンガ・ライトノベル・音楽・美術などと等価に配置されざるを得ないのだとしたら、私たちは何をどう学び、活用し、探究を進めるべきなのかを、千田洋幸先生は問いかけていたのかもしれない。

(国文学科准 教授 野中 潤)

講師紹介



千田洋幸 (ちだ・ひろゆき)

1962年生まれ。東京学芸大学卒業。立教大学大学院博士課程満期退学。島崎藤村を中心とした日本近代文学研究から出発し、その後、ジェンダー・スタディーズ、国語教材研究、ポップカルチャー研究に関心を広げる。著書に『テキストと教育―「読むこと」の変革のために』（溪水社・2009）、『ポップカルチャーの思想圏―文学との接続可能性あるいは不可能性』（おうふう・2013）がある。



2017年度国際教育学科シンポジウム

『Overarching Vision and Prospects for the Internationalization of Teacher Education: How Can Teachers' International Experiences and Perspectives Affect Classrooms, Children, and Youth?』

教師教育の国際化に関する可能性と展望：教師の国際化は教育をどう変えるか

開催：平成29年10月31日(火) ゲスト講演者：Britt Due Tiemensma氏・Thomas Kjærgaard氏

The Department of Global Education held an anniversary symposium on October 31, 2017 to celebrate the inauguration of the Department with guest speakers from two of our partnership institutions from Denmark, University Colleges of Absalon and Northern Denmark in Aalborg. We proudly demonstrated scholarship excellence and high potential for future growth of the Department through innovative presentations and interactive roundtable discussion in our beautifully equipped new building. The significance of the Symposium lay in its fruitful and productive deliberations to the audience on unique pedagogy and classroom instruction through a variety of topics based on the rapport established among professors from University Colleges of Denmark and faculty and students, mostly from English and Global

Education, of Tsuru University. In keynote presentations, President Seiji Fukuta explained the difference between international and global education in relation to pedagogy in detail and Professor Tiemensma presented the integrated ideas of disciplines, critical theory, semiotics, and innovation management for teacher education. Following the Fika (“coffee break” in Swedish), Dr. Kjærgaard argued how technology can help overcome challenges in cross-cultural education programs in higher education and Dr. Eriko Yamabe of Global Education discussed how teachers can be accelerators rather than obstacles in the age of globalization. Dr. Yamabe efficiently and brilliantly moderated and facilitated the following roundtable discussion, which led the entire audience to an understanding of multicultural and multifaceted

ways of viewing the world based on their interdisciplinary approaches to knowledge.

The Department of Global Education has been recognized as an officially certified International Baccalaureate institution that offers the skills and concepts of educating active, compassionate, and lifelong learners. As the Department prepares for a distinctive study abroad program with opportunities for internships and international teaching practicum, this symposium has become an important platform to successfully exhibit the strength of the partnership with University Colleges of Denmark and to employ an inquiry based active learning style in both bilingual and solely English or Japanese language settings.

(国際教育学科 教授 森川鈴子)

ゲスト講師紹介



Britt Due Tiemensma

Senior Lecturer of University College Absalon, Denmark. MAs in Religion and the Arts and in General Didactics from Aarhus University.



Thomas Kjærgaard

Senior Lecturer of Teacher Education, University of College of Northern Denmark. MA and PhD in Philosophy, Language, Linguistics and Media from Aalborg University



都留文科大学 初等教育学科・地域交流研究センター主催

開催：平成29年12月16日(土)

講演者：本田秀夫 氏

『発達障害と学校教育』 ～発達障害児のライフステージを踏まえた支援の在り方、学校教育の役割を考える～

初等教育学科では今年度より特別支援学校教職課程がスタートし、特別支援教育に係る専門科目が多数開設され多くの学生が熱心に履修しています。障害児への教育は「特別支援教育」として制度転換し、拡充が図られて10年が経過しました。特別支援教育は特別支援学校のみならず、通常の学校に在籍する特別なニーズをもつ子どもたちの教育をも充実させるという使命を担っています。

なかでも新しい障害概念として登場した「発達障害」への理解や支援の在り方は喫緊の課題となっています。そこで発達障害研究の第一人者であり、山梨県立こころの発達総合支援センター初代所長でもある本田秀夫先生に「発達障害と学校教育」と題してご講演いただきました。

本田先生は本県における発達障害支援の先駆者として、診療や療育システムの開発等を牽引され大きな功績を残された方です。そして多くの患者さんを、幼児期から青年期、成人期まで長期に亘って診療されており、豊かな臨床経験に基づいた貴重な研究成果を著書や講演など様々な場で発表されています。こうした知見から本田先生のお話には、いつも「人が育つことへの温かい信頼」が感じられます。

講演会はこうした本田先生のお話を聴きたいと、県内外から229名も

の参加者があり、会場は満員御礼となりました。本学の学生、小、中、高等学校の教師、子育てに心配をお持ちの保護者の方、地域福祉に関わる専門職の方など様々な方が参加して下さいました。

講演では、「目に見えない異常」に気づく大切さ、育児のコツ、本人の主体性を大切に「合意」、わが国の学校教育の課題、健康でハッピーな生き方とは、など示唆に富んだ分かりやすいお話をして下さい、聞き入っているうちに90分があったという間に過ぎてしまいました。参加者は其々の心に新しい気づきをもたらされたようで、たくさんの感想が寄せられ、発達障害等の支援に係る課題が確認されました。

また、講演の前には特別支援学校教職課程の学生たちが、地域と共に

取り組んでいる発達障害児のキャリア教育プログラム「キャリアデザインワーク」の報告を行いました。これは、発達障害のある中学生、高校生と特別支援教育を学ぶ大学生が「はたらくとはどんなことだろう」と考えあい、地域の事業所で職場体験をさせてもらうワークショップです。まだまだ模索中ではありますが、報告を聞いた方からこれに参加したいという声もいただきました。改めて、今後も地域と共に歩みを進めていきたいと考えております。

参加者の皆様と共に有意義な時間が過ごせましたことを心から感謝申し上げます。

(初等教育学科

特別支援学校教職課程担当

原 まゆみ)

講師紹介



本田秀夫 (ほんだ ひでお)

所属：信州大学医学部附属病院子どものこころ診療部 部長 / 診療教授
専門領域 / 発達精神医学・児童青年精神医学

経歴：1988年3月 東京大学医学部医学科卒業
1988年6月 東京大学医学部附属病院精神神経科
1990年6月 国立精神・神経センター武蔵病院精神科
1991年9月 横浜市総合リハビリテーションセンター発達神経科
2009年4月 横浜市総合リハビリテーションセンター
発達支援担当部長兼 横浜市西部地域療育センター長
2011年4月 山梨県立こころの発達総合支援センター所長
2014年4月より現職

所属学会等：医学博士、精神保健指定医、日本児童青年精神医学会代議員、日本発達障害学会評議員、日本自閉症スペクトラム学会評議員、日本自閉症協会理事、全国情緒障害教育研究会顧問、JDDネットワークなどの理事、特定非営利活動法人ネスト・ジャパン代表理事



2017年度 都留文科大学 ジェンダー研究プログラム講演会

開催：平成29年

『男がづらいよ —— 男性学の視点から見た日本』

12月13日(水)

講演者：田中俊之 氏

2017年12月13日(水)に、田中俊之さん(大正大学心理社会学部准教授)によるジェンダー研究プログラム講演会が行われました。

ジェンダー問題は「女性」や「LGBTQ」の視点から語られることが多いわけですが、男性の視点からジェンダーの問題、男性の「生きづらさ」について語られることは必ずしも多くはありません。こうした視点が関心を呼んだのか、田中さんのユーモラスで軽妙な語り口も相まって60名以上の参加者で活気の溢れる講演会となりました。

とりわけ、ご自身のパートナーとの会話や日頃目にする当たり前の風景を、男性学の視点で切り取って、日本社会のいびつさを提示したこの講演は大変興味深く、考えさせられました。講演では、男が男らしさを証明するためには誰かに勝たなければならないという競争の論理が、男性自身を縛り、「弱音ははけない」「本当の自分が出せない」状況をつくりだし、人とかわかることを困難にさせていること。そして、「男らしさ」をめざせばめざすほど、生きにくくならざるをえなくなる社会のシステムを、具体的にわかりやすく説明してくれました。さらには、政府が盛

んに強調する「女性活躍社会」も、現在の日本社会のなかでは、女性も「男性」化せざるを得なくなり、現在男性が抱えているのと同じような困難に直面することになるという指摘は、たいへん重要なものです。

こうなってしまう原因は何か、そしてこの状況を変えるには何をすべきなのかということにも田中さんは言及され次のように述べています。

「男らしさ」とは、決して歴史超越的で普遍的なものではなく、ある社会がその「必要」に応じて作りだしたものであって、その根源には日本社会の男女間、職業間等の不平等性があること。

そしてこれを乗り越えるには、ある意味で社会を、自分とは異なる価値

観を持つ個人や集団と出会った時の純粋な経緯や開放性が価値あることであるという(ダイバーシティを認め合う、積極的寛容を軸とした)社会へと変革することが必要であること。

ただし、そうした変革のためには、私たち一人ひとりが、社会的な役割から距離を置いた個人の領域の意義を認め、自分が安心できる場、聞いてくれる人がいる場をつくりだし、自らのワーク・ライフバランスを見直していく「勇気」を求められる。参加者は、熱心にこの講演を聞き、これらの提案をそれぞれが受け止めていました。

(初等教育学科 教授 佐藤 隆)

講師紹介



田中俊之 (たなか としゆき)

1975年、東京都生まれ。大正大学心理社会学部准教授。男性学を主な研究分野とする。

著書『男性学の新展開』青弓社、『男がづらいよ—絶望の時代の希望の男性学』KADOKAWA、

『〈40男〉はなぜ嫌われるか』イースト新書、『男が動かない、いいじゃないか!』講談社プラスα新書、小島慶子×田中俊之『不自由な男たち—その生きづらさは、どこから来るのか』「日本では“男”であることと“働く”ということとの結びつきがあまりにも強すぎる」と警鐘を鳴らしている。



【教育のどっち?】今の教育カリキュラム or コミュニティースクール Think2050 あなたはどっち? テーマを設けてみんなでギロン!

開催：平成30年1月17日(水)

講演者：音羽真東氏

英文学科後期講演会では、プロジェクトマネジメントのスペシャリストである音羽真東さんをお迎えし、「教育」をテーマに参加者全員で議論を重ねました。

最初に与えられた問いは、「そもそも『考える』とは何をすることか?」考えたことがありそうで、改めて答えるのには詰まってしまうような問いでしたが、頭を悩ませながらも全員がそれぞれ付箋に一行で自分の思う答えを書き、発表していきました。様々な意見が飛び交いましたが、大事なことは、正解がないということ。そして自分の言葉で説明することが大切だということだと音羽さんがおっしゃってくださいました。そしてその後は今回のメインテーマである、「今のカリキュラム or コミュニティースクール」について考えていきました。議論をするにあたって音羽さんから与えられたルールは三つ。

- 発言は、積極的に。主訴を30秒にまとめる。
 - ・自分のために：伝えることで、自分の理解が深まります。
 - ・周りのために：新しい観点に、気づききっかけになります。
- 個人批判と受け取らない。意見批判とは別。
 - ・個人攻撃・ヘイトスピーチ・ネガティブキャンペーンは×。
 - ・ディベート(論破・勝ち負け)が目的ではなく、合意が目的。
- 多数決をしない。“未合意”を合意する。
 - ・多数決は少数派の排除につながり、必ず対立を生む。

・合意した論点を延々と続けない、未合意点に注目して質問!

以上の点に注意して、相手を打ち負かす(競争)をするのではなく、合意形成を目指す(共創)を目標に議論を行いました。まずはそれぞれ今の教育カリキュラムがいいと考えるか、それともコミュニティースクールなどの既存の教育カリキュラム以外がいいと考えるのか、二つの立場に分かれて座り、なぜそちらがいいと考えるのかを発表。その間「問い」を考え続け、相手側へ立場に対する質問があれば随時投げかけていきました。議論はどんどん盛り上がり、最初のメインテーマである「今のカリキュラム or コミュニティースクール」という問いから「担任の先生は必要か?」「国数英理社の5科目である必要はあるのか?」などへと広がっていきました。そして最後の問いは「何のために学ぶのか?」音羽さんからは、目的を定めた上で学びをするための手段を考え、その手段を選択できれば、力強い学びができるのではないだろ

うかという言葉をいただきました。

私たち英文学会が年2回運営している講演会はこれまで講義型のものがほとんどでしたが、普段とは異なる議論型の講演会の楽しさも体感でき、あっという間の90分となりました。普段の学生生活ではこのように誰かと問いを交わしたり、議論することはなかなかありません。しかし異なった意見を持った人と合意形成を目指す方法を知っていることは、これから社会へ出て行く私たちにとって特に大切なのではないかと強く実感しました。また今回の議論や最後にいただいた音羽さんの言葉を通し、今の教育カリキュラムにも、それ以外の新しいカリキュラムにも、どちらにもメリット・デメリットがあり、そのどれもが学びをするための「手段」であるということを確認しました。これを踏まえ、今後は学ぶ目的によってその手段を選択するという視点で考えてみたいと思います。

(英文学科2年 高橋楽々)

講師紹介



音羽真東 (おとわ まさと)

株式会社マネジメント代表取締役。大手外資系IT日本法人やシンクタンク・金融融合システムで1,200人規模の統合プロジェクトマネージャーとして活躍。一方で、参加型のワークショップ・セミナー活動を開始。併せて大手金融・流通会社やWeb関連企業のIT化や業務改善プロジェクトを並行支援。プロジェクトマネジメント知識や経験を活かし、マネジメント理論を研究・知識体系化、会社設立に至る。さらなるマネジメント理論を研究し続けながら、マネジメントサポートを行っている。

卒業演奏会を終えて



1年生の時、音楽専攻生として入学してきた私には卒業演奏会での4年生の先輩たちの姿がとても大きく見えました。卒業試験でもあるこの演奏会は、私たち音楽専攻生にとって大きな目標であり、憧れの舞台でもあります。うぐいすホールという大きな舞台上で堂々と演奏する先輩方の姿をみて、私も4年後にはあんな風に演奏したいと思ったことを覚えています。しかしいざ本番が近づくと、不安や焦りばかりが増えていきました。そんな時、近くで笑い合い、励まし合える仲間が存在が本

当にありがたいものでした。そんな仲間達との別れが近づいていると思うと悲しくもありますが、最後に大きな思い出を作ることができて本当に嬉しく思います。応援してくれた家族、切磋琢磨し支え合った音楽専攻の仲間たち、根気強く指導してくださった先生方には感謝してもしきれません。ピアノはここで一旦区切りとなりますが、音楽を通じて得たもの、学んだものは私にとって大きな宝物です。

(初等教育学科4年 松山ゆりか)

卒業制作展を終えて

自分らしさの追求



私は、大学へ入学するまで、「図工・美術」とはあまり縁のない生活を送っていました。そんな私ですが、1年生の冬、所属する専攻を決める時期を迎え、紆余曲折ありながらも図工・美術専攻を選びました。2年生では、彩画・版画・彫塑・工芸の授業を通して図画工作・美術における基礎的な表現力を鍛え上げました。3年生からは、平面ゼミに所属し、2年生の時に学んだことを活かしながら彩画・版画の表現活動を行い、表現することで楽しさを味わうことができるということに深い関心を抱きました。

図工・美術専攻では、本学を卒業して「表現者」(芸術家)を目指すというわけではなく、基本的には「教育に携わる者」(教師)などを目指します。そのため美術的価値の高い作品を作ることが目的ではなく、子どものようにのびのびと表現する経験が大切なのです。それは、子どもが無我夢中で絵を描いたり、粘土で遊んだりするように、自分の思いのままにのびのびと表現することなのです。私は、図工・美術専攻の先生方から、それらのことに気付かされました。

私は、卒業制作に墨を使った絵画作品を3点制作しました。そして3つの作品には、それぞれ「都留の足跡」という共通の

タイトルを設定しました。私がこれまで4年間、都留での生活を通して発見した・感動した・ときめいた「都留にあるもの・こと」を題材とし、一つのかたちにすることでこの地に自分の「足跡」を残そうという思いが込められています。そして、「力強さ」を自分らしく、「絵心」というよりは「絵力」のある作品を目指して精一杯表現しました。

また、今回の卒業制作展のテーマ「～ing」は、常に何か動いているという現在進行形「～している」を意味しています。私達の作品は、常に手を動かしながら自分らしさを追い求め出来上がったものです。本展に足を運んでくださった方々からは、「魅力的な作品ばかりだった」「どの作品にも個性が表れていて良かった」「素晴らしいかった」などといったお声をいただき、まさに、私達が掲げた「～ing」というテーマに込めた「自分らしさの追求」という思いを感じ取っていただくことができても嬉しく思います。

最後に、お忙しい中、本展にご来場いただいた多くの皆様にご心より感謝申し上げます。

(初等教育学科4年 菊池克哉)

県民コミュニティーカレッジを開催

県民コミュニティーカレッジ地域ベース講座「日本映画の歴史と美学」を2号館2101教室において全4回の日程で開催し、のべ59名が受講しました。

今年度の県民コミュニティーカレッジは、講師に国際教育学科のノルドストロム・ヨハン専任講師をむかえ、第1回「日本無声映画」、第2回「日本の音楽映画」、第3回「1930年代のトーキー映画」、第4回「1950年代の映画産業」の4つのテーマで講義を行ないました。

日本映画の黎明期の作品である1920年代の無声映画から戦後1950年代の映画産業まで、大正から昭和にかけての日本の映画史30年を、今現在残されている貴重なフィルムを鑑賞しつつ、様々な視点からアプローチし考えていきました。



参加者からは、「ここまで古い映画を見る機会が無いので、良い経験になったと思います。現代映画までの歴史を見ることで、現代の映画がどのような変化を遂げて今の形になったのかということが分かったのでおもしろ

かったです。」「日本映画を題した講座は初めてでしたが任侠映画、人情映画の歴史と現在の状況にまで比較出来る楽しさを知ることができ感謝しています。」などの感想をいただきました。

* 講座の様子や参加者の感想は、地域交流研究センターのブログで紹介しています。

「3Dプリンター」を利用した ものづくりの公開・展示

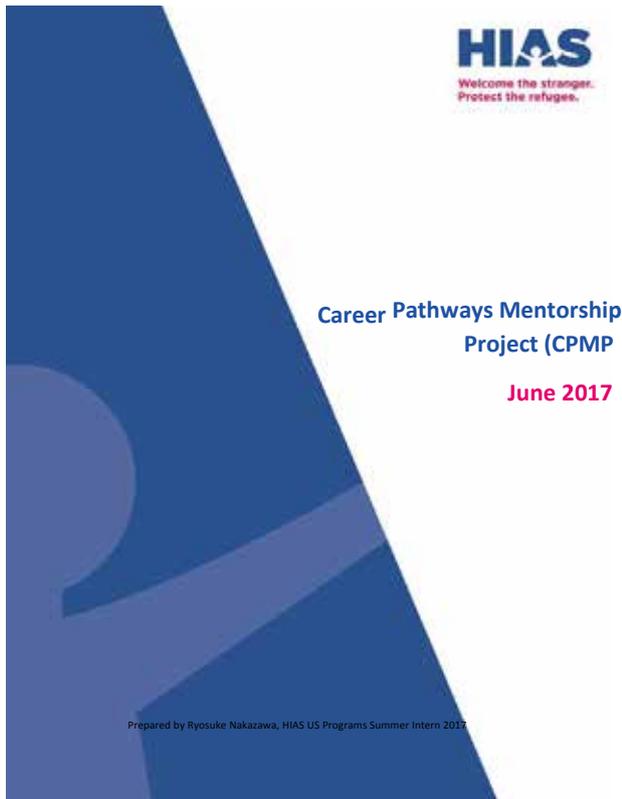
デジタル図工室
情報センター特任教授 杉本光司



3Dプリンター実演中

ICT機器を使ったものづくりの現場を写真や映像ではなく、直接子どもたちに見てもらい、将来ICTを理解するための資質を芽生えさせることを期待して、平成29年10月26日に大学のデジタル図工室の3Dプリンターを都留市立旭小学校に持ち込みました。当日は児童玄関前に設置し、中休みや昼休みには自由に、中には担任の先生が時間を作って連れてきてくれたりして、サイコロやサッカーボールの制作過程を直接見て体験してもらいました。また、事前に作成した雪だるまや地域の3D地形図等も展示させて頂きました。

子どもたちには付箋紙を用意して自由に感想を書いてもらいました。その中で「将来データなどをつくる人になりたいと思います」、「3Dプリンターが少し欲しいかも」、「自分の顔を作ってほしい」等と予想もしていなかった思いを書いてくれた子どももいました。また、プリンターの前で長い時間じっと造形過程を観察している子どもには私たちが感激させられました。



遊学奨励金レポート 英文学科4年 中澤涼介

私は、平成29年4月から8月の期間、アメリカのメリーランド州シルバースプリングにある難民再定住支援団体 HIAS (ハイアス) で5ヶ月間インターンをしました。長期に渡ってのインターンシップが可能となった遊学奨励金の支援に対し、この場をお借りして、選考に携わっていただいた多くの皆さまに感謝の意をお伝えします。

インターン生が関わる3つのプログラムは基本的に全て、国務省からの資金を元に経済的援助を通して難民支援する形になっています。1つのプログラムでは、アメリカに来る HIAS の受け持つ難民全員が受給対象となり、一定額から難民の生活必需品を揃え、家賃を支払うなどの金銭面でのサポート、さらに社会保障番号の登録援助等、新たな生活を始める上で必要不可欠な手続きのサポートを行います。別のプログラムでは、新たな試みとして一般市民と難民とのマッチングプロジェクト（メンターシッププログラム）を企画し、その草案作成に携わりました。HIAS インターンシップでのハイライトとして、Allocation Meeting（割り当て会議）への参加があります。この会議は、毎週国務省から送付される、移住予定難民に関わる報告書をもとに、各個人や家族のケース、健康状態、国籍、民族背景等の書類上の情報と、その難民の話す言語を話せるスタッフがいるかどうかなどの「支援側の状況」も踏まえ、決められた人数を割り当てていく（再定住先を決定する）というものです。この会議に参加し、実際の交渉の状況を目の当たりに出来たのは貴重な経験となりました。

私の母親がフィリピン人ということもあり、幼少から移民・難民については常に関心がありました。現在のトランプ政権下だからこそ尚更、アメリカの難民系団体で

インターンを経験したいとの思いがあり、予てからの希望が叶ったのは非常に嬉しくかけがえないものになりました。HIAS はかつて世界大戦前後で生まれたユダヤ難民をサポートするために135年前ニューヨークに設立された歴史の長い団体です。しかし、近年の人道危機に応えるために、ユダヤ系の人々以外にも支援を開始しました。つい2週間前にも新たなパートナー団体として、イスラム系の団体と協定を結ぶことになりました。かつて迫害されていた立場だったからこそ、“My people were refugees too” という意識のもと、違った背景を持った人でも、そんな彼らに同情し共感し、同じように接することができます。国を越えた人の移動は進み、価値観や考えの衝突は常に起こり続けます。それでも、同じ人間として、同胞として、これからも人道支援の舞台で、私なりに出来る事に全力で取り組んで行きたいと考えています。



私たちは昨年(2017年)の12月に開催された、全国学生英語プレゼンテーションコンテストに参加し、全国3位に当たるインプレッシブ賞(グループの部)をいただきました。これは、グローバル社会での活躍を目指す学生たちにスキルアップの場を提供しようと、2012年に始まったものです。参加者はその年の4つのテーマの中から一つを選び、それに沿って原稿を作り、約10分間のプレゼンテーションを行います。今回は東大や京大といった、名だたる大学を含む全国各地の学生641名が1次予選に応募し、そのうちの320名が2次予選に進出しました。本選には個人の部・上位5組とグループの部・上位5組が入り、熱のこもったプレゼンテーションを繰り広げました。

私たちは「日本の本の英訳版翻訳を売り込め！」というテーマを選び、宮下聡 特任教授が執筆した「中学生になったら」の英訳版の出版を売り込みました。アトムをモデルに、学ぶこと、働くこと、人生をデザインすることの3つの観点から、本の魅力をアピールすることができました。このコンテストを通し、英語力を磨くとともに、伝えることの楽しさを学べ、私たちにとって貴重な経験になりました。



英語プレゼンテーションコンテスト

英文学科3年
池 京香・山田倫子

サークル紹介 カンボジアに図書館を

社会学科 環境・コミュニティ創造専攻3年
カンボジア支援サークル plenty 代表
横森智樹



こんにちは！カンボジア支援サークルPlentyです。私たちはカンボジアに図書館を建てることを目標にこの1年間を活動してきました。2018年3月にカンボジアのシェムリアップに図書館が完成します。

私たちは3月10日から3月21日にかけてカンボジアでスタディーツアーを行います。スタディーツアーでは、ポルポトの大虐殺などのカンボジアの歴史を学習するほか、図書館の建設現場でカンボジアの子供達と一緒に壁画を描くなどの図書館建設の仕上げをして、完成式に出席します。

ここまで活動が続けられたのは応援してくださる皆さんのおかげです。日々の地域での募金活動、教科書プロジェクト、桂川祭での出店などたくさんのご支援とご協力をありがとうございました。また来年度以降もPlentyとして活動を続けて参りますので、引き続きよろしくお願ひします。

訃報

平成30年1月30日(火)、名誉教授 高橋宏幸氏がご逝去されました。ここに先生の生前の御功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

「次期公立大学法人 都留文科大学学長候補者が決定いたしました」

平成29年12月20日、公立大学法人 都留文科大学学長選考会議において、現都留文科大学学長 福田誠治氏の任期が平成30年3月31日で満了となるため、公立大学法人 都留文科大学学長選考規程第4条第1項第5号の規定に基づき、学長最終候補者の選考を行い、次のとおり学長候補者を決定し、現学長の福田誠治氏が再任されました。

氏名：^{ふくだ せいじ}福田誠治
 現職：学長
 任期：平成30年4月1日～平成32年3月31日

編集後記

初等教育学科 教授 水口 潔

2017年12月20日、地域交流研究センター市民公開講座が開催され、内山美恵子先生から「都留市東桂地区の湧水環境」について、これまでの研究成果を踏まえてお話を伺った。薄々感じているものの、富士山がもたらす恵の時空間的な大きさ・深さに再び感銘を覚えることとなった。その講演の中で、度々示されたのが定点観測のデータであった。同じ場所で積み重ねられたデータであるからこそ、過去との比較などが説得力をもって示される。私が専門としているスポーツの世界の定点観測に思いを巡らしてみたいところ、全英オープンテニス（通称ウィンブルドン）のテレビ中継が頭に浮かんできた。130年以上に渡り、同じ時期に同じ場所で開催されるこの大会は、天然芝のコート（中でもセンターコートは、この2週間の大会しか使用しない）で有名である。毎年同じアングルでテレビ中継されているので、最終日に行われる男子シングルス決勝は、現地6月中旬の午後14時から1年に1回の定点観測ともいえる。時代とともにプレースタ

イルも変わり、その影響が芝の色が薄くなる場所の違いははっきりとみることができる。2000年以前は、サーブ&ボレーを得意とする選手が活躍していたが、最近では、ベースラインで激しく打ち合うスタイルが主流となっている。コート中央やネット前の芝の色褪せることが、近年では見受けられなくなっている。オールファンとしては、ダブルスを中継してもらうなどして、ネット際での華麗なプレーが見たいと思うのであるが。

実は普段の生活においても、通勤電車で定点観測していることに気づいた。ほぼ同じ電車（私だけが呼んでいるセブンフォーセブン7時47分の直通電車）に乗り、ほぼ同じ座席で、車窓を眺めている。日本の原風景と富士山の移り変わりを繰り返し目に焼き付けていきたいと思う。ちなみに帰りは、いつも暗くなってしまうので。



富士山と中央線▶

ぶんだい堂

―書き換えられた教育の原理―

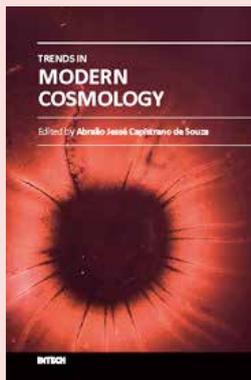
ネオリベラル期教育の思想と構造



福田誠治 著
 2017年12月発行
 東信堂

◇ふくた せいじ
 学長

Trends in Modern Cosmology



Abraao Jesse Capistrano de Souza 編
 平野耕一他 著
 2017年6月発行
 InTech

◇ひらの こういち
 初等教育学科 准教授

リメイク映画の創造力



北村匡平 志村三代子 編
 2017年12月発行
 水声社

◇しむら みよこ
 比較文化学科 准教授